

小・中学校
東京都道徳教育郷土資料集
(第2集)



平成19年3月
東京都教育委員会

はじめに

平成十八年十二月に、教育基本法が改正され、同年十二月二十二日より公布・施行されました。今回の改正で、第十三条が新設され、「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」と学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力について明示されました。

さて、東京都教育委員会では、平成十一年度から区市町村教育委員会と連携して、「道徳授業地区公開講座」を実施してまいりました。この公開講座の趣旨は、次のとおりです。

①意見交換を通して、家庭・学校・地域社会が一体となった道徳教育を推進する。

②道徳の授業の質を高め、道徳の時間の活性化を図る。

③道徳の授業を公開することにより、開かれた学校教育を推進する。

この公開講座は、平成十四年度からは都内すべての公立小・中学校で実施され、平成十五年度には公開講座の一層の充実を目的とした推進委員会が設置されました。

このように今日まで、家庭や地域社会と一体となって推進する心の教育の普及に努めてきたところではありますが、今後、より一層、道徳教育の要である「道徳の時間」の特質を生かした指導の充実が不可欠であることは言うまでもありません。昨夏、東京は二〇一六年オリンピック競技大会の国内立候補都市に選定されました。東京都では、オリンピック競技大会の開催を、さらに魅力的な都市に生まれ変わるための絶好の機会であるのとらえ、「一〇年後の東京」を策定し、東京が近未来に向け、環境、安全、文化、観光、産業など様々な分野で、より高いレベルの成長を遂げていく姿を描き出しました。本書は、首都東京の子供達に、「ふるさと意識」を醸成し、郷土や国に対する愛着や誇りをはぐくむことをねらいとしております。このねらいを達成し、都内公立小・中学校のすべての児童・生徒に充実した道徳教育を推進していくために、道徳の時間で活用する「東京を題材とした読み物資料集」を活用例とともに編集したものです。

各学校においては、第1集（平成十七年度発行）及び本書第2集を活用し、道徳の時間の一層の充実が図られますよう期待しております。

終わりになりますが、本書の編集に当たられた道徳授業地区公開講座推進委員会の皆様、資料提供をしてくださいました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成十九年三月

東京都教育委員会教育長

中 村 正 彦

第一章 郷土資料



協力：公共広告機構

たかおの 山やまの てんぐ（八王子市はちおうじ）

おかし、たかおの 山やまに、てんぐが いました。

てんぐは、まい日にち 高いたか すぎの 木きの

てっぺんから、山に のぼってくる 人ひとを 見みていました。

そして、てんぐは、山にのぼって くる わるい人を

こらしめ、よい人を たすけて いました。

ある日ひの ことです。

「きょうも 朝あさ早くから 山に のぼって くるなあ。」

この たかおの 山には お寺てらが あり、たくさんの
人が おまいりする ために、山を のぼって きます。

しばらくすると、朝 一番いちばんに のぼって きた

おじいさんが、てんぐの 前まえを、とおり すぎて
いきました。

「がんばれ。がんばれ。」

てんぐは、うちわを あおぎながら おうえん しました。
ところが、おじいさんは 足を からませて ころんで
しまいました。

「いててて……。こんな ところで ころぶなんて
えんぎが わるい。気きをつけて 歩あるかなあ。」

おじいさんは、ころばないように ゆっくり ゆっくり
のぼって いきました。

「わし、何か なに わるいこと したかなあ。ただ、がんばれと
おじいさんを おうえんした だけなのに。わるいことを
してしまった。」

やがて、こんどは、おばあさんと わかものが ふたりで
のぼって きます。

「なんて えらい わかものだ。」
ふたりは、手てを つなぎながら、ころばないように

のぼって きました。

「がんばれ。がんばれ。」

すると、先ほどの おじいさんと 同じように、ふたりは、足を からませて ころんで しまいました。

「まただあ。わしが おうえんすると ころんでしまう。

きのうまでは、こんなこと なかったのに。」

てんぐは、えだから 下に おりて、みんなが ころんだ

ところに いきました。よく見ると、すぎの 木の

ねっこが、道ぜんたいを うめつくすほどに、長く 太く

のびて じめんに はりだして いたのです。

「この すぎの 木の ねっこのせいで みんな

ころんだんだ。こんなに ねっこが はっていたら

のぼって くる 人が こまって しまう。

切ってしまうのも かわいそうだし……。」

てんぐは、まっかな顔かおをもっとまっかにして
こまってしまいました。

「しかたない。じめんをほって、木をぬいて
うごかすことにするか。」

さっそく、てんぐは、ほりはじめました。

しかし、かんたんにぬくことはできず、お日ひさまが

しずおころになっても、ねっこの先は見えません。

あたりもまっくらになり、手さぐりでほりつづけ

ました。体からだもすっかりつかれてしまいました。

「いつになったらねっこの先が見えるのだろう。」

おまいりにくる人たちのためにも、一日も早く

ぬかなくては。」

そんなことを考かんがえながら、いつのまにかてんぐは、

すぎの木の近ちかくでねむってしまいました。

つぎの日、朝早くおきると、すぎの木が目めの前に

ないことに気づきました。

あたりを見回すと、道に長くのびていたねっこもありません。そして道のはずれには、ねっこをたまのようまるに丸くして立っているすぎの木がありました。

てんぐは、近くによってすぎの木にさわってみました。たしかに、きのうのすぎの木が、立っているのです。

「だれがうごかしたんだろう。ふしぎなこともあるなあ。」

しばらく考えこんでしまいました。

「でもこれでころぶ人はいなくなるだろう。

よかった、よかった。」

てんぐは、すぎの木を見ると、あんしんして、またいつものように太いえだにすわって、山にのぼって

くる 人を 見ていました。

山に のぼって くる 人は、それいらい、ころばずに
のぼって いきました。

さて、長く 太い ねっこを たまのように 丸くした
すぎの 木。きつと、てんぐの ようすを 見て
丸く しようと思^{おも}ったのかも しれません。

(齋藤 賢二 作)

あいさつ通り（国分寺市）

「おはよう　ございます！」

としくんが、学校へ行くとき　通る　道は、いろいろな人が　あいさつを　しながら　通って　います。としくんも、　ともだちと　あいさつを　しながら　いっしょに　学校へ　行きます。

「おはよう！」

「おはよう！」

かどを　まがり、学校が　見えて　くる　ところまで　来ると、いつもの　おじさんが　立って　います。

（あの　おじさん、この前　校長先生が　朝会の　ときに　お話　してくれました、ちいきを　みまもって　くれている人だけど、こわそうな　顔を　しているから

にがてだなあ。^{おも}と、思いながら、そこだけは、いつも走^{はし}って通り過ぎていました。

ある日の朝^{あさ}、先生が教室^{きょうしつ}でこんな話^{はなし}をしてくれました。

「ねえ、みんな知^しっていますか？」

みんながすんでいる国分寺市^{こくぶんじ}には、

『あいさつ通^{どお}り』という

かんばんが、かかっている

通^{どお}りがあ^あるんですよ。」

「あ！ それ見たことあるよ。」

と、だれかが言^いいました。

そういえば、学校に來^くるとちゅうで見たことがありません。



「そうですね。『ここを 通る 人は みんなで

あいさつを かわしまししょう』ですって。なんだか
とても すてきだと 思わない？」

と、にこにこしながら 話をして くれました。

としくんは、先生の 話を 聞きながら

（先生は『すてきだね。』と、^い言っ^て いたけれど、^{なに}何が
すてき なんだろう。）

と、思いながら、朝、学校へ 来る とちゅうで あう
おじさんの ことを 思い出して いました。

つぎの 日の 朝、やっぱり あのかどを まがった
ところには、いつもの おじさんが 立って います。

としくんは、先生が きのう 話して くれた ことを
思い出しました。

（ここは 『あいさつ^{くわ}通り』だもん。がんばって

あいさつしよう。

「おはよう　ございます。」

と、大きな　声こゑで　あいさつを　しました。

すると、おじさんは　にこにこ　わらいながら、

「おはよう！　元げん気きだね。　べんきよう　がんばってね。」

と、やさしい　ことばが　かえって　きました。

としくんは、なんだか　おねの　おくが　とても

すっきり　しました。

（大野　寿久　作）

ようこそ はな子さん（武蔵野市）

井の頭自然文化園に、アジアぞうのはな子がいます。

はな子は、タイの国で生まれて、七さいまで
上野動物園ですごしました。

そのあと、ここへやってきて、五十年がたちました。
ずいぶん年をとりましたが、今でも元気です。

きょうもしずかな朝です。

「はな子や、おはよう。さあ、朝ごはんだよ。」

しいくがかりのおじさんが、やさしく声を

かけました。はな子は、長いはなとひらひらした耳を

ゆったりとうごかして、えさを食べています。

おいしそうに食べるようすは、おかしと少しも

かわりません。

しいくがかりのおじさんは、はな子の小さかった

ころの ことを おも 思いだして いました。

はな子が、動物園どうぶつえんの ふかい みぞに おちて しまった
ときの ことです。

「おじさん、たすけて。いたいよ。早く、ここから
ひきあげて。」

というように、はな子は、大きなおお 声で お ないて います。
おじさんは、大いそぎで、かかりの ひと 人たちを よんで
きました。

「はな子、今いま、たすけるからな。」

おじさんたちは ちから 力を あわせて、おもい おもい
はな子を たすけあげました。

「よかった、よかった。」

おじさんは、はな子の はなを なでて やりました。
はな子が おとなになっ てきた ころに、こんなことも
ありました。

はな子の 元げん気が なくなり、どんどん やせて
いくのです。おじさんは しんぱいして、はな子の
大きな 体からだを いろいろ しらべて みました。すると、
今まで 四よん本ほんあった はが、一いっ本ほんしか のこって
いませんでした。

はな子は、かなしそうに おじさんの 顔かおを 見みつめて
います。おじさんは、はな子を 元げん気に する ために、
いっしょうけんめい 考かんえました。

「そうだ、こうしてみよう。」

おじさんは、りんごと さつまいもと
バナナを、きかいで こまかく くだきました。それに、
ほねが 強つよくなる えさを まぜて みました。
すると、はな子は、その えさを あっというまに、
ぜんぶ 食たべて しまいました。

おじさんは、それからも ずっと ずっと はな子が

食べやすい えさを つくって いるのです。

おじさんの おかげで、はな子の たいじゅうも
少しすこずつ ふえて、すっかり 元気に なりました。

はな子は、けさも おいしそうに えさを 食べています。

「きょうは、はな子の たんじょうパーティーだよ。

おぼえて いるかい、おまえが ここにき来た ときの

おいわいの 歌うたを。」

おじさんは、小さな 声で 歌いました。

「ようこそ ぎげん はな子さん

大きな 体からだに かわいい目め

やさしい ともだち にんきもの

おかえて うれしい ぶんかえん」

はな子は、耳を 大きく 広ひろげて、おじさんの 歌を

じっと 聞きいて いました。

(北村 博 作)

うえの先生せんせいと　ハチ（渋谷区しぶやぐ）

おかし、しぶやの町まちに　うえの先生せんせいという　大学だいがくの

先生が、くらしで　いました。

ある日ひ、一いっ匹びつの子犬こいぬが、うえの先生の　家いえに

もらわれて　きました。おくさまが、その　子犬こいぬに「ハチ」

という　名前なまえを　つけました。

「ハチ、いい名前を　もらったね。」

先生は、そう　言いいながら、お母かあさんいぬと　わかれて、

もらわれて　きたばかりの　ハチの　頭あたまを　なでました。

そして、やわらかな　もうふで　やさしく　くるんで

やりました。

ハチは、よく　おなかを　こわしました。先生は、
そんな　ハチに　くすりを　のませで、しばらくの間あいだ、

自分の^{じぶん} ベッドで ねかせました。先生に おなかを
さすって もらいながら、ハチは 先生の よこで
すやすやと ねおりました。くすりが がいのか、
ほかの人^{ひと}が のませると、ハチは とても いやがったのに、
先生だと いい子^こになって のみました。
先生は、しごとで 長く^{なが} 家^{いえ}に 帰^{かえ}って こられない
ときが ありました。そんなときは、家の人^{うちの人}に ハチの
ことを 日記^{にっぴ}に つけておいて もらいました。
ひさしぶりに、家^{うち}に もどると、その 日記を 読^よむのを
楽し^{たの}みに していました。ハチも 先生の となりで
いっしょに じっと 聞^ききました。先生は、
「そんなことが あったのかい。」
と、にこにここと ハチの せなかを なでました。
それは、ひさしぶりに あった、先生と ハチの
しあわせな 時間^{じかん}でした。

そのころの　しぶやには、へいたいさんが　てっぼうの
れんしゅうを　するところが　ありました。ハチは、
さんぽに　出でかけたとき、てっぼうの　音おとが　とても
こわくて、いつも　びくびく　したものでした。

ハチは、かみなりの　音も、花火はなびの　音も
こわがりました。先生は、そんな　ハチを　ひぎの　上
のせて、

「だいじょうぶだよ。」
と、せなかを　さすって　あげました。

さむい　冬ふゆの　まよなか、おしっこに　いきたくなった
ハチが、とびらを　かたかた　ならします。その音に
気きがついて、おきて　くれるのも、いつも　先生でした。

やがて、ハチは　大きおおくなり、先生が　出かける　ときは、
しぶやの　駅えきまで　お見みおくりりに　いくようになりました。

先生が 帰かえってくる 夕方ゆうがたになると、また、しぶやの

駅えきまで おおかえに いきました。

雨あめの日は、ずいぶん ぬれました。風かぜの日には、

すなほこりが、目めに 入りました。それでも、先生を

見つけると、しっぽを ふって とびきました。先生の

ようふくは、どろだらけに なって しまうのですが、

先生は にこにここと ハチの 頭あたまを なでました。

しかし、しあわせの 日は、長ながくは つづきませんでした。

先生は、とつぜん、なくなって しまったのです。きゆうに

あえなくなつた 先生。ハチは 先生の においのする

シャツからは なれませんでした。

それから、ハチは いつもの 時間じかんになると、しぶやの

駅えきまでいき、先生の 帰りを まちました。何時間なんも、

何時間なんも まちました。

こうして、毎日、でん車の音がするたびに、耳を
ぴんと立てては先生のすがたをさがし、帰りを
まちつづけたのでした。

いつのまにか、十年いじょうがすぎました。ハチは、
としをとりました。それでも、よぼよぼと駅におかう
ハチのすがたがありました。

ある日、ハチは近くをながれるしづや川の
たもとにやってきました。ハチには、もう歩く力は
ありませんでした。そこへすわり、そっと目を
とじました。やがて、ハチのいのちは、しずかに天に
のぼっていきました。うえの先生のまつ天へ、高く
高くのぼっていきました。

先生の帰りを、さいごの日までまちつづけたハチ。

かぞくは ハチの おはかを、うえの先生の おはかの
となりにつくってあげました。
それから 何十年も たちました。ふたりは、今も
なかよく ならんで、しずかに ねおっています。

(橋本 ひろみ 作)
(林 正春 編「ハチ公文献集」参考)

おじぞうさま（豊島区）

わたしのお母かあさんは、かたがいたくておいしやさんに
かよってあめいます。少しすこずつよくなってききましたが、
雨あめの日にひなると、いたおようで、かたをさすって
います。

わたしがしんぱいそうに見みていると、
おばあちゃんが、

「すがものおじぞうさまに、おねがいしてみようかね。
とげぬきじぞうとってね、わるいところをなおして
くれるんだよ。」

と、教おしえてくれました。

つぎの日、二人ふたりでおまいりに行くことにしました。
すがもの駅えきを出でて、にぎやかなお店みせのとおりを
しばらく歩あるいていくと、おじぞうさまのある、お寺てらの

前まえに 出でました。

お寺てらの 入いり口ぐちに、大おおきな おかまおかまのようような 物ものが

ありました。白しろい けむけむりが、もくもくと 出でて います。

おまおまいりに 来きた 人ひとは、その けむけむりを 体からだの

あちこちあちこちに ふりかふりかけて いまいました。

そこそこから 少少しし はなはなれた ところところに、たたくさんさんの

人ひとが れれつつを つくつくって ならならんで いまいました。そこそこには、

何なにも つつけて いいない おじおじぞうぞうさまさまが いて、みみんなんなが

水みずを かけかけて、タタオルオルで ゴゴシシと ここすすって いまいます。

自じ分ぶんの いたいたい ところところと 同おなじ ところところを ああららうと、

ななおおるるののだだそそううでです。

わわたたししたたちちの 番ばんに ななりりまましした。

「ささあ、いいっっししよよに ああららおおう。」

と、おおばばああちちゃゃんんが 言いいまいましした。

「おお母もさんさんの かかたたの いたいたみみが ななくくななりりまますすよよううに。」

ゴシゴシ　ゴシゴシ。

「あっ、そうだ。おばあちゃんが、いつまでも、げんき元気で

いられますように。」

ゴシゴシ　ゴシゴシ。

おばあちゃんが、うれしそうに　ほほえんで　いました。

（山本　純子　作）

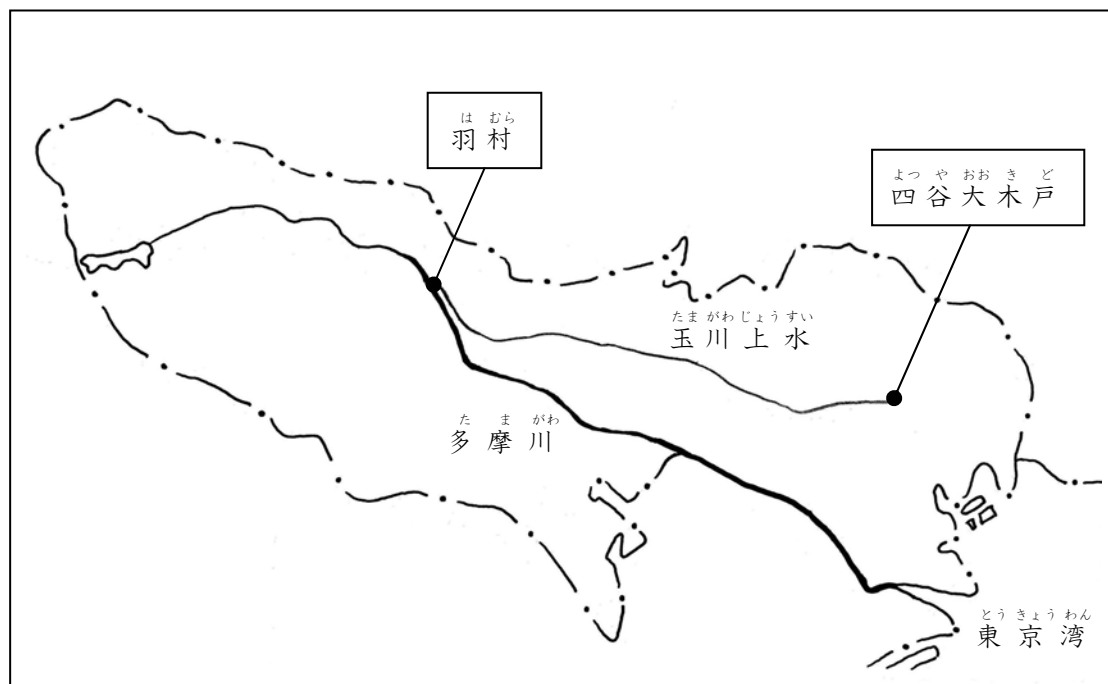
たまがわじょうすい たまがわきょうだい はむらし
玉川上水と玉川兄弟（羽村市）

今からおよそ四百年ほど昔の慶
長八年（一六〇三年）に、徳川家
康が、江戸（今の東京）に幕府を
開きました。

それからは、風船がふくらむよう
に、江戸の町はどんどん大きくなっ
ていきました。

武士や町人がおおぜい住むようにな
ると、町に大きな問題が出てしま
した。生活に欠かすことのできない
飲み水が、足りなくなってきたので
す。

「近ごろは、お水も買わなければい
けなくなってきました。でも、お水を



「買うお金などないよ。」

「火事が起きてしまっても、火を消すための水がないんだ。安心してくらすこともできない。」

「飲み水がなくては生きてはいけない。どうすればいいのだろうか。」

と、江戸の町人たちはこまりはてていたので。

そこで、長い長いほりをほって、多摩川の水を江戸の町まで通す計画がたてられました。江戸幕府が開かれてから、およそ五十年後のことです。

このほりづくりを計画したのは、庄右衛門・清右衛門という兄弟です。二人には、このほりづくりが、たいへんな工事になることはわかっていました。でも、江戸の人たちがこまっていることも知っていませんでした。

「なんとしてでも、この工事を成功させたい。」
強い思いをおねに、工事を引き受けたのです。そして、羽村から四

谷大木戸やおおきど（今の新宿区しんじゅくくあたり）までほりをほって水を流しなが、四谷大木戸からは、地下に石や木でつくった水道管すいどうかんをうめて、江戸の町中へ水を通すことを考えました。

羽村から四谷大木戸までは、およそ四十三キロメートルあります。この間の高さのちがいはたった九十二メートルです。これは、百メートルほるごとに、やく二十一センチずつ低くひくしていくことになります。そのためのそくりようは、よほど正かくにやらないといけません。そのころは、きちんとしたそくりようをすることはたいへんおずかしいことでした。夜、ちようちんやせんこうの明かりを利用して高さや直線をはかったという話が残のこっています。

また、兄弟の仕事しごとは二度も失敗しっばいしたと言われています。

一度目は、青柳村あおやなぎ（今の国立市くにたちしあたり）から多摩川の水を引き入れようとして、ほりをほったのに、とちゅうで流れながが止まってしまい、先へ進すすまなくなりましたときのことです。

二度目は、今度は福生村ふっさき（今の福生市ふっさしあたり）から水を引き入れる

計画を立て、やっとほりができたのに、水を流したら水が地下にしみこんでしまっただめになったというものでした。

朝からばんまで休むひまなく重い土をほり、運び続けた農民たち。人々はみんながっかりし、江戸の町にとどくことなく土の中にしみこんでは消えていく水を、ただ見つめることしかできませんでした。

そして、玉川兄弟のくやしさも人一倍でした。兄弟は、工事の失敗や、いっしょうけんめい工事に参加してくれた農民たちの気持ちを考えると、夜もねおれませんでした。

また、このとき、兄弟は幕府から工事のためにもらった六千両も使い果たしてしまっていたのです。このままでは、工事を続けることができません。こまった兄弟はある日、家族に自分たちの屋しきを売って、工事のためのお金にしたいと伝えました。家の人たちはおどろきました。

「失敗したからと言って、なにも自分たちの家を売ることはない。」
そう言う人もいました。しかし兄弟は、

「失敗したから売るのではない。どうしてもやりとげたいことがある

から売るので。」

と、あつい思いで話しました。

兄弟のしんけんな思いを知り、農民たちもまた、必死ひっしに働はたらきました。

こうして、家を売ったお金を元に、人々の思いをのせて工事はものすごい早さで進んでいったのです。

ついに、完成かんせいした羽村はむらの水門から水を流し入れる日がやってきました。村々からは水の通つうかを知らせる花火があがります。

「水は、順調じゆんちように流れています。」

早馬はやうまが水の流れを知らせて走ります。そのたびに、集あつまった人たちは大きなかん声をあげました。

「水だ。水がきたぞ！」

だれかがさけぶと同時に、ドドドッと、江戸の町にいきおいよく水が流れこみました。

「やったぞ。水だ。」

「ありがたい。この日をどれだけ待まちわびていたか。」

江戸の人たちはなみだを流して喜びまよろこした。

農民たちの目にも、なみだが光っていました。

そのすがたを見て、玉川兄弟もこみあげる思いにふるえる手で、たがいのかたをだき合ったのです。



(羽村市郷土博物館資料一部引用)

(後々 陽子 作)

全校遠足とカワセミ（杉並区）

おさむは、来週の木曜日がとても楽しみでした。秋の全校遠足があるからです。場所は、杉並区にある和田堀公園です。たんにんの先生から、行動するときのはんは、いつも活動しているたてわりはんだと聞いたとき、おさむは心の中で、

（やったー、たけしくんといっしょだあ。）

と、うれしくなりました。今、クラスはちがうけれど、ようち園のころからのなかよしです。

（たけしくんと何をして遊ぼうかな。）

おさむは、たけしと楽しく遊んでいる自分のすがたを頭にえがきました。

いよいよ今日は遠足の日。秋晴れの気持ちのよい日です。六年生のリーダー小林さんを先頭に、善福寺川ぞいの道を歩いて公園を目指しました。歩きながらたけしが、そっとおさむに話しかけてきました。

「おさおくん、和田堀公園のひみつを知ってる？」

「えっ、何？」

「和田堀公園には大きな池があって、そこにカワセミがいるらしいんだ。」

「カワセミって……？」

「鳥さ。おとなの手の平ひらくらいの鳥で、とてもきれいな色をしていて、『空飛ぶ宝石』ほうせきって言われているんだ。体のわりにくちばしが長くて、水の中に飛びこんで魚をとるんだよ。」

「へーっ、すごいね。」

「しかもカワセミは数が少なくなっていて、めったに見ることができないんだ。今日はカワセミを見つけたらぜっこうのチャンス！ おさおくん、いっしょに行こうよ。」

鳥のことはあまりくわしくないおさおでしたが、たけしの話にだんだん引きこまれていきました。

ようやく公園に到着ちやくしました。木の葉はの色がとてもきれいです。

どんぐりもたくさん落ちています。走りまわれるような大きな広場ひろばもあります。遊ぶ前に、六年生の小林こばやしさんから話がありました。

「これからみんな遊ぶ時間です。わたしたちのはんは、大なわとおにごっこをやります。なかよく遊びましょう。」

その後、はんのたん当の先生が、

「この公園は広いし、はぐれないようにしてくださいね。自分じぶん勝手かってな行動をしてはいけませんよ。」

と、遊ぶときの注意ちゆういを話されました。おさおはさっきのたけしのお話を思い出し、

（残念ざんねんだけど、池には行いけないなあ。でも、その分みんな楽しく遊ぶぼう。）

と、思いました。

いよいよ遊ぶ時間です。大なわが始はじまりました。大なわの順番じゆんばんを待まっているとき、たけしがおさおに耳打ちみみうちしました。

「大なわの後あと、二人でここをぬけ出して池を探さがしにいきましょう。」

さっきの小林さんと先生の話が頭をよぎりましたが、おさむは、「わかった。」
と、あいまいに返事へんじをしてしまいました。おさむにとって楽しいはずの大なわの時間が、急きゅうにゆううつになりました。

大なわが終おわり、おにごっこの始まる時間になりました。たけしはおさむの手をとり、

「さあ、行こう。」

と、声をかけてきました。たけしに手を引かれ、二、三歩進すすんだところでおさむの足が止まりました。おさむは心のもやもやをふりはらうように、思い切ったけしに言いました。

「たけしくん、やっぱりだめだよ。」

「えっ？ さっきは行くって言ったじゃないか。」

たけしは、おどろいた顔で言いました。

「そりゃあ、ぼくだってカワセミは見たいさ。だけど……。」

ピーッ！

おにごっこが始まるふえが鳴りました。おさむとたけしは、おに見つからないように、急いで大きな木のかげにかくれました。おさむとたけしは、木のかげでしばらくだまったままでした。おさむが、おにの位置をたしかめていたとき、たけしがつぶやきました。

「やっぱり、やめるよ。」

「えっ？」

おさむが聞き返しました。

「池に行くのをやめるよ。今日は全校遠足なんだから、みんなで楽しく遊ばなきゃ。勝手な行動はいけないよね。でもね、おさむくん。ぼくはどうしてもカワセミが見たいんだ。だから、今度、うちの父さんをお願いして、この公園に連れてきてもらうよ。おさむくんもいっしょに来ようよ。」

そのとき、おにが木の近くまで走ってきました。

「にげろ！」

たけしの合図で、おさむは木のかげから飛び出し、思いきり公園の中を走り出しました。顔にあたる風、目に飛びこんでくる緑がとて

も気持ちよく感じかんました。

(武田 淳 作)

野鳥のすお水辺（西多摩郡奥多摩町）

山々が間近にせまり、目にうつるけしきは緑でいっぱいになり、川を流れる水の音や鳥たちのさえずりが聞こえてきました。

「お父さん、あの鳴き声は何？」

「あれはね、ミソサザイ。ピーツピピって鳴いているだろ。」

わたしは、父といっしょに夜明け前に家を出発して、多摩川の上流にある鳩ノ巣溪谷にやってきました。初めての魚つりを、父が教えてくれるというのです。

溪谷にかかるつり橋をわたると、ひんやりとした空気に包まれました。橋の上から、はるか下の川原を見下ろすと、水の流れはエメラルドのようにかがやいて、川底の石まではっきり見えます。川岸には、もうすでにつりをしている人が何人かいました。

「気持ちがいいね、お父さん。」

「この辺りは夏になると、ホタルが飛ぶんだよ。多摩川も、家の近くだどごみやあわがいっぱいだけど、上流はきれいだね。」

父もうれしそうです。

わたしは、

（同じ多摩川なのに、家の近くとここではなぜこんなにちがうのかな。）

と、思いました。

わたしたちは川原におりて、つりをするポイントを探さがしました。父は、

「浅あせい所ところだとなかなかつれないから、ふちがある方へ行こう。」
と言って、草むらの中をずんずん川上の方へ進すすんでいきました。いっせいに鳥や虫たちが飛とび立ちました。おそろおそろ父の後ろうしろをついて行くと、右の方でガサガサと音がしました。

「あっ、お父さん、あそこあそこ。何かいる。」

父が草むらをかき分わかけてみると、一メートル位ぐらいある、はい色の大きな鳥がうずくまっています。

「アオサギのようだね。」

ときおり大きな羽はねをバタバタさせ、とても苦くるしそうです。

わたしたちはそっと近づきました。よく見ると、足につり糸がからまって動けないようでした。

さらに近づくとき、アオサギは、じっとおとなしくなりました。父はつり道具箱の中からはさみを取り出し、いくえにもからまったつり糸を一本一本、すばやく切り始め、切った糸は道具箱へ入れていきました。ようやくつり糸を全部切り終え、わたしたちはアオサギから少しはなれて、じっと様子を見ていました。すると、アオサギは起きあがり、ゆっくりと助走して大空へ飛び立ちました。

「よかったね、お父さん。」

空を見上げながら、わたしはほっとして言いました。けれども父は、「だれだろう、こんな所につり糸をすてたのは。見つけるのが早かったからよかったけれど、つり糸が鳥の足やくちばし、つばさにかからまると死んでしまうこともあるんだ。」

と、おこったように言いました。

川にそって歩いていくと、流れが少し曲がるところで、父がつりのポイントを見つけてくれました。えさのつけ方を教わって、さっそく、

つりにちよう戦^{せん}してみました。わくわくして待^まっていましたでしたが、いつまでたってもつれません。

そのとき、一羽^わの白と黒のまだらもようの小ぶりな鳥が、ものすごくいきおいで川の中へ頭から飛びこみ、さっと魚をとっていききました。「うわあ、やっぱり鳥の方が魚をとるのはうまいね。」

わたしは感心^{かんしん}して言いました。

「ヤマセミだよ。ひさしぶりに見た。水^{みず}辺^べは鳥たちにとって食^たべ物^{もの}をとったり、水浴^{みずあ}びをしたりと、生きていく上でとても大^{たい}切^{せつ}な場^ば所^{しょ}なんだよ。」

と、父が言いました。

わたしは父の言葉^{ことば}を聞き、家の近くの多摩川の様子を思いうかべました。そして、目の前の溪流^{けいりゅう}、多摩川を見つめながら、自然^{しぜん}や生き物^{まも}を守る^{まも}ることについて考えました。

(堀田 直樹 作)

日曜日のバーベキュー（あきる野市）

ゆたかな自然しぜんが楽しめる秋川あきかわには、多くの人が集まりあつ、思い思いの休日きゅうじつをすごす。なかでも、バーベキュー場じょうは、ぼくのお気に入りの場所ばしょでもある。

この間の日曜日、ぼくの家族かぞくは、友だちのみきおくんみきおくんの家族と、秋川でバーベキューをした。天気もよく、木々の緑みどりもあざやかだった。ぼくは、みきおくんと川で遊あそんだ。水がすんでいて、小さな魚おぼが泳いでいた。

「おうい、肉が焼やけたぞ。もどっておいで。」
向むこうで、お父とうさんの声こゑがした。ぼくたちは、うれしくなっかけてかけた。とちゅう、川原かわらのちよっとおくまった所ところに、ごみがたくさん積つまれているのが見えた。

バーベキューは、とてもおいしかった。
ぼくたちは、ジュウジュウと音ねのする、あつあつの料理りょうりを、みんな

なでわいわいと食^たべた。こうして、楽しく気持^きちのよい一日をすごした。

日が西にかたむいてきたので、お父さんたちは、帰りのしたくを始めた。まわりの人たちも、それぞれに帰りじたくだ。

ビニールのふくろに四つもごみがでた。そのごみを、お母^{かあ}さんが、車にぎゅうぎゅうおしこんでいたので、

「あっ、ごみをすてる場所があったよ。ぼくとみきおくん、すててきてあげるよ。」

と、あわてて声をかけた。

お母さんは、

「あら、ごみすて場があるの。とても助^{たす}かるわ。じゃあ、お願^{ねが}いね。」

と、ごみのふくろをぼくたちに、わたした。

さっきの所^{ところ}までくると、何人かの人^{ひと}が、そこにごみをすてているところだった。

ぼくも、そのごみの山に向^むかって、ポイツとビニールぶくろを投^なげ

た。そのとき、立て札ふだが目に入った。

ごみをすてないで！

ここはごみすて場ではありません。

自分たちのごみは、自分たちで持ち帰もってください。

「えっ？ ごみは持ち帰ってくださいって書いてあるよ。」

ぼくとみきおくんは、顔を見合わせた。

「どうする？」

ぼくは、まずいなと思ったが、みきおくんは、

「ほかの人もすてているんだから。」

と言いう。ぼくたちは少しまよったが、結局けっぎよく、ごみをその場にすてた

まま家族のところへもどった。

帰りの車の中では、楽しかった話でもりあがったが、ぼくはなんとなく、さっきの立て札のことがひっかかっていた。

家に着き、荷物をおろしていると、お母さんが、

「ああ！ いやねえ……。」

と、げんかんで大きな声をだした。

「どうしたの。」

ぼくは、急いでとんでいった。

なんと、げんかんに止めておいたお母さんの自転車のかごに、空き

かんとおかしの空きぶくろが入っていたのだ。

「だれかが、ごみばこのかわりに、入れていったんだわ。失礼しちゃ

う。」

お母さんは、ぶつぶつ言いながら、そのごみの始末をしていた。

ぼくも、はらがたった。でも、お母さんの自転車のかごに入っていたごみを見ながら、ぼくは、今日、自分がすててきたごみのことをま

た思い出していた。

（橋本 ひろみ 作）

くじら祭まつり（昭島市あきしまし）

今日は、ぼくが楽しみにしていた、くじら祭まつりの日。

くじら祭は毎年八月の第一土曜日だいちどようびと日曜日に行われる昭島市のお祭りまつり。

昭島市に転校してきたばかりのぼくには、初めてはじのくじら祭なんだ。

友だちのゆうくんに、

「大きなくじらもパレードするよ。」

って聞いたから、すぐワクワクしているんだよ。

それから、ゆうくんも野球やきゅうチームのみんなでパレードに参加さんかするって言っていたから、ゆうくんに会うのも楽しみ。

いよいよパレードが始はじまった。たくさんの人がパレードする中で、大きなくじらをふくらませたような風船がいくつもあらわれたのを見て、びっくりしたよ。



たぐさんの人が見に来ていて、いろいろなグループやチームの人が参加していた。ゆうくんもパレードのまん中あたりで、「火の用心。」

と、かけ声を合わせながら歩いていて。とても暑い中、長い長い道を歩いているのに、全然つかれた顔をしないで、元気いっぱいに大きな声を出していたんだ。

おどりをおどったり、おもしろいかっこうをした人がいたり、消ぼう自動車は何台も登場したり、すごく楽しかった。

家に帰ってから、どうして「くじら祭」って名前になったのか不思議に思っ、お母さんといっしょに調べてみた。そうしたら、

・以前は「昭島市民祭」という名前だったこと

・お祭りが行われるようになる何年も前に、昭島市でくじらのほねが発見されて、昭島市が昔、海だったことがわかったこと

・昭島市では、マスコットとしてくじらという言葉や絵をいろいろなところで使うようになったこと

・市民祭を親したしみをこめて、「くじら祭」とよぶようになったこと
などがわかった。

そういえば、駅前には「くじらロード」もあるし、「くじら運動公園」や、マンホールにくじらの絵がかかれたものもある。なんだか、かわいくって、いいなあって思った。

「くじら祭」が、もとは「昭島市民祭」っていつていたことがわかった。ぼくは、パレードのことを思い出していた。パレードでは、「昭島市をいい町にしよう。」

「子どもたちをはんざいから守ろう。」

とよびかけながら、みんな楽しそうに歩いていた。

「昭島大好き。」

と歌うたいながら、おどっている子どもたちもいた。

くじら祭は、昭島市民のためのお祭りだったんだ。

ぼくは、ゆうくんのとびきり元気な

「火の用心。」



の声のわけがわかったように思った。

まどの外をながめると、たくさんの家なみがひろがっている。くじら祭に出会ったことで、ぼくには昨日きのうまでとはちがった町に見えてくる。町にわたる風が、ぼくの心にもすがすがしくふきこんできた。

(後々 陽子 作)

波浮のお池（大島町）

「おうい、船が難破しているぞ。」

雨が横なぐりにたたきつけ、枝をなぎたおしたあらしの一夜が明けた。波浮のお池のみさきまで様子を見にいった若い者が、とんで帰ってきた。

「人が打ち上げられている！」

村人総出で助けに向かったが、とうとう息をふき返さなかった。

船は、あらしの中、波浮のお池ににげこもうとしたものの、入り口の岩場にはばまれ、こなごなに打ちくだかれたものらしかった。

たくさんの積み荷とともに流れ着いた板切れには、三吉丸みよしまるという船の名前と船頭せんとう以下十人が乗りこんでいたことが書かれていた。（とても助からぬ。）



と、かくごを決めた船頭が、

(家族に伝えてほしい。)

と、書き残したものであった。

「波浮のお池が、港になっていたら、助かっていたら……。」
その様子をじっと見ていた平六は、ぎゅうと手をにぎりしめた。

江戸幕府のじゅん察官(みまわり)の案内役を務め、伊豆の島々をまわっていた平六は、江戸に帰ってからも、あの波浮のお池の様子が頭からはなれなかった。

(あそこが港になれば、おきを通る船の安全も、人々のくらしも、今よりずっとよくなる……。港を中心にして土地を切り拓けば、新しい村も起こせるだろう……。)

平六は、くりかえしくりかえし幕府に進言した。

初めて波浮のお池を見て以来十年、平六の人が見こんだ多くの人々のあとおしによって、ようやく幕府の許可がおりたのであった。

寛政十二年(一八〇〇年)三月、波浮のお池と海をへだてている岩を取り除くという大工事が始まった。

えの長さが三メートルもあるような石のみを打ちこんで、岩をけずり、小舟に乗せて、おきに捨^すててくるのである。なにしろ、水の中での仕事なので、工事の人々の苦勞もなみたいではなかった。

しかし、工事の設計^{せつけい}は実に堂々たるものだった。平六が、許可がおりるのを待っていた十年間、勉強しつくしたあとが十分示されていた。そのため、大きなけが人もなく、工事は着々と進んでいった。

「この岩場をどうするんだ！」

と、あきれていた人々も、いかにも港の口らしくなっ
ていく工事に、目を見はつた。

ところが、最後までどうしても取りのぞけない大岩があつて、これがまた、船の出入りの中心と



なる所に、どんと居いすわっている。工事の人々は、これを『大頭』おおあたまと呼よんでいた。海中の見えない部分は、たたみ八じょうほどもある大きさ。たとえ千石船せんごくぶねでも、ぶつかったらひとたまりもないものだった。

海女あまや石工いしくは、息の続く限りかぎ海にもぐり、石のみで打って大岩にいどんだ。しかし、あまりの固さにのみがはね返されてしまって、どうしても割わることができない。人を増ふやしたくとも、海上の仕事場はせまく、働く人数に限りがある。平六は、

「うーむ。」

と、うで組みをしてうなってしまった。

平六は、何日も何日も『大頭』に登り、手でさわって考えこんでいた。

やがて、きっぱり、

「これしかない！」

と言うと、大岩を強くたたいた。

「割れないのなら、このままお池の真ん中まで運んで行って、しずめよう。」

まず、とにかく岩根いわねをつきくずすことである。少しずつ少しずつ、しかし決して休まず工事は続いた。

次に、岩をぐるぐる太^{ふと}づなで巻^まき、村々から集めた空^{から}たるをうきとしくくくりつけた。

いよいよ、大岩を動かす日がきた。これが失敗すれば、今までの苦勞が、水のあわになってしまふ。

うの刻^{こく}（午前六時）、大きな重い岩に、総^{そうりよく}力をあげて人々がとりついた。腹^{はら}にひびくたいこに合わせ、

「よいしょ！ よいしょ！」

と、かけ声をかけてつなを巻き上げる。そのかけ声やたいこのひびきが、波^は浮^ぶのお池の三方のがけにあふれかえった。

そして、日の光が海にきらめきたつたつの刻^{こく}（午前八時）、
「わあっ！」

池いっばいにかん声があがって、大岩が動き出した。はげしくなるたいこに合わせ、ほりにほられた海中の岩根がぐらつき、ついに大岩がすべりだした。そのまま、池の真ん中まで引きずられた大岩は、つなを切られると同時に大うずを巻き起こして、しずんでいった。

延^のべ一万五千人の力による大工事が、ここに見事に完成した。じっと見つめている平六の目が、朝日をあびてキラリと光った。

そののち、波浮の港を中心に、新しい村づくりが始まった。平六は、一家をあげて波浮に移住し、その中心となって働いた。

天保六年（一八三五年）の記録によると、伊豆大島の波浮の港村は、戸数三十三戸、男女百四十五人が住み、漁にはげみ、畑作に打ちこみ、ききんのない平和な村になっている。

（平林 和枝 作）

心にふく風（千代田区）

川上先生のところへ、昔、受けもった教え子の絵里さんからこんな手紙が届きました。

先生、お元気ですか。わたしは、この春からホテルの中の日本料理店で働いています。小さいころから、東京のすてきなホテルで一流のおもてなしを身に付け、働くことが夢だったので、毎日大変ですが、じゅう実しています。東京にはたくさんホテルが次々に開業しています。そんな中でもすばらしいホテルだといわれるよう、がんばっています。

この間の連休は家族連れも多く、大いそがしでした。その中で、考えさせられる出来事がありました。

小学校の高学年ぐらいの男の子と、その両親がお店にいらっしやいました。お食事中に、この男の子がお茶をこぼしてしまったのです。テーブルから洋服の方へ、お茶が流れ落ちそうになっていたことに気づきましたので、わたしは、急いでおしぼりをお持ちしました。

「大丈夫ですか。」

と、おしぼりを差し出すと、男の子とお母さんかあはだまってそれを取り、あわててふき始めました。わたしもテーブルの上のお茶をふきました。男の子とお母さんは、よごれたおしぼりをわたしのおぼんの上に、また、だまって置きました。そして再びふたたび、食事を始めました。

しばらくしてから、わたしはそのテーブルに、

「ご飯はんのおかわりはいかがですか。」

と、うかがいにいきました。男の子は、お父さんとうと話したまま、手に持っていたお茶わんをわたしのおぼんの上にだまって、ポンとのせました。心の中に、寒い北風がふいたようでした。でも、そんな気持ちをかくして、笑顔えがおでサービスを続けました。

しばらくすると、別のテーブルに、小さな女の子と母親が座すわりました。

わたしは、同じように笑顔でサービスを心がけました。女の子に、

「おかわりはいかがですか。」

と、声をかけました。女の子は、

「お願いします。」

と、わたしの目を見ながらそう言うと、わざわざ両手で自分のお茶わんをわたしのおぼんの上にのせました。よそって持って行って差し上げる

と、親子で楽しそうに話をしていたのに、一しゅん、話をやめて、「ありがとうございます。」と、わたしの目を見て、にっこり言うのです。今度は、心の中をあたたかな南風がふきました。

ホテルは、サービス業ぎょうです。お客様に失礼がないように、また、お客様が気持ちよく過すごせるように……。それがわたしの仕事です。そんな仕事をしながら、わたしの心の中には、北風がふいたり、南風がふいたりするので。

そのときだけしか会うことのない人たち。知り合いでもないホテル従業員ぎょういんのわたしに北風を送る人……。そのちがいについて考えてしまいました。

先生、また、お手紙を書きます。わたし、がんばります。先生もお元気で。

手紙を読み終えて、川上先生も、絵里さんの心の中にふいた風について考え始めていました。

(橋本
ひろみ
作)

半助の投あみ（調布市）

調布市の南側を流れている多摩川には、いろいろな魚が生息しています。休みの日には、多摩川でつりを楽しむ人も少なくありません。

今から、百年ほど昔の話です。

多摩川の水は、今と比べるととてもきれいでした。また、多摩川には、スナヤツメ、ウナギ、アユ、ウグイ、オイカワなど、たいへん多くの種類の魚がすんでいました。調布には、農作のかたわら川魚をとって生活をしている人たちがたくさんいました。

上布田宿（今の調布駅のあたり）に、万七という漁師が住んでいました。おさないころから多摩川で父の手伝いで漁をしていた万七は、上布田宿でも一、二を争う投あみ打ちの名人になりました。アユ漁の時期には、だれよりもたくさんアユをとっていました。

アユは、初夏のころからとることが出来ます。初めのうちは、一日中、簡単にアユをとることが出来ますが、一か月もたつとアユもりこうになつて、だんだんとれなくなります。

そこで、布田^{ふだ}あたりの漁師たちは、日暮れ^{ひぐ}のころから五、六人組で多摩川に出かけていき、川下から川上にかけて一番、二番、三番と投あみを打ちました。そして、打ち終われば川上にあがるという漁をくり返していたのでした。

深さ二十から三十センチメートルのところをたなとよんでいましたが、たなであみ打ち場として使われていたところが狛江境^{こま えさかい}から飛田給^{とび たきゅう}までの間に十か所もありました。漁師たちは、七時から九時までの間に十回もあみを打っていました。

万七の仲間に半助^{はんすけ}という漁師がいました。生まれつき体が弱かった半助は、あみを打つことが得意ではありませんでした。うまく打つには、できるだけ遠くにあみを投げ、しかもあみが丸く広がるようにしなければなりません。

しかし、半助が打つとあみがなかなか広が



らず、まとまって水の中に落ちてしまうのでした。たまたま広がっても
アユは数えるほどしかとれませんでした。

今日もやみの中で、万七たちがアユ漁をしています。

万七は、あみをたぐりながら言いました。

「重いぞ、重いぞ。大漁だ。今年のアユはよく身がしまってうまそうだ。」
たぐり寄せるにつれて、アユの体は月の光を受けてきらきらと光りま
す。しかし、半助のあみにはまったくアユがかかりません。

「おい、半助。おまえはあいかわらずあみ打ちが下手ただなあ。いったい
何年漁をしているんだ。そこいらの子どものほうがよっぽど魚をとる
ぞ。」

万七はそう言うと、大声でわらいました。万七につられてほかの仲間
もわらいだしました。

どうやってもうまくいかない半助は、じっと下をむいているばかりで
した。

万七たちは、とれたアユを仲間と同じように分け合っていました。万
七のかつやくで、今日も大漁です。

「今日も大漁だ。みんなもよくがんばったな。半助は別だけどな。」

万七は、そう言うのとたくさんのアユをみんなに分けるのでした。

「万七さん、すまねえな。おいらは、いつも分けてもらうばかりで……。」
半助がすまなそうに言うのと、

「そう思ったら、あみ打ちのけいこをしつかりやることだな。」

万七は、そう言い残すと、かごをえいっとかついで、はな歌を歌いながら帰りました。

秋をおかえて、日がめつきり短くなりました。いよいよ今年のアユ漁も終わりです。

万七は、飛田給の友達の家遊びに出かけました。さんざんごちそうになり、帰りがすつかりおそくなってしまいました。

「いやあ、すつかりごちそうになっちゃまったなあ。明日も仕事だ。早く帰ってさっさとねなくっちゃなあ。」

ひとり言を言いながら、家路を急ぎました。すつかり夜がふけて、あたりはしいんと静まり返っています。そんな中で、一けんだけ明かりがもれている家がありました。

「なんだ、こんなに夜ふかしをして、仕方がねえなあ。」
よくよく見ると、半助の家です。

（半助の家じゃねえか。あんなに夜ふかしをするから、昼間に力が出ねえんだ。ひとつ小言こことを言ってやろう。）

万七はそう思って、半助の家に近づきました。

すると、家の戸のすきまから、人の声がします。どうやら、半助のおふくろさまの声です。

「これ、半助。もういい加減かげんにしてねないかい。明日に差しつかえるよ。」

「心配ないさ。おいらは、漁がうまくねえ。

いつも、みんなに迷めいわくばかりかけている。

あみぐらい立派りっぱにつくらねえと、みんなに会わせる顔がねえんだよ。」

半助の声が聞こえます。

万七がすき間から、家の中をのぞくと、竹のあみ針はりでたんねんにあみをつくる半助のすがたが見えました。ランプの明かりをたよりに、ひと針、ひと針ていねいにあみ目を通す半助の目は、真けんそのものです。そして、細こま



かいあみ目が少しずつ、少しずつできあがっていきます。

万七は、半助の様子を見ているうちに、次第しだいに心苦しくなってきました。そして、自分のこれまでの半助に対する態度たいどをふりかえり始めました。

万七は、はっとして家に向かって走り出しました。家に帰って布団ふとんに入っても、なかなかねつくことができません。

万七は、おもてに出て、空をながめました。すんだ秋の夜空には、まん丸な月がこうこうとかがやいています。

「おいらがたくさんアユをとれるのは、おいらだけの力じゃねえ。半助、すまなかったな。半助、ありがとうよ。」

万七は、心の中でそうつぶやくのでした。

(赤堀 博行 作)

あの感動を伝えたい

―夕焼け小焼け

中村雨紅 ― (八王子市)

『夕焼け小焼け』という童どうようを知っていますか。夕暮れゆうぐどきになると、町のあちらこちらから流れてくるあのメロディーです。

この曲きょくの作詞者さくしである中村雨紅なかむらうこうは、明治三十年二月六日に、八王子市上恩方町おんがたで生まれました。

雨紅あまねは十四歳さいになると、学校の先生になるために、東京の(当時は港区北青山みなとにあった)青山師範学校あおやましはんがっこうに入学しました。そのため、八王子をはなれて生活するようになりましたが、夏冬の休みには、よく八王子の自宅じたくへ帰りました。当時、八王子駅までの乗り物はあったものの、そこから自宅まで約十六キロも歩かなくてはなりませんでした。

雨紅あまねが、八王子駅を降りて案下街道あんげかいどう(現在の陣馬街道じんばかいどう)を十キロ以上歩くと、夕暮れどきの陽ひは陣馬じんばの山かげに今やしずもうとし、山里にあるお寺から打ち鳴らされるつりがねのひびきが山々にこだましてきます。早く家に帰り着いこうと家路いえじを急ぐ雨紅あまねの歩く道筋みちすじは、だんだん夕やみの中に包まれ、西の空はふるさとの山々の姿すがたをくつきりとうかび上がり

せて、あかね色にきれいに染ま^そっていきます。その夕焼け小焼けの中を、からすが一羽^わ、二羽、三羽とねぐらへ向かってでしょうか、山のかなたへ飛んでいくのも見えました。

「もう一息だ。」

雨紅はこの辺^{あた}りまで来ると、いつも空を見上げたのでした。すでに空には円^{まる}い月ものぼり、一番星がきらめくような光を放^{はな}っているのも目に入^いってきます。

そして、夜空いっぱい星が広がるころ、雨紅は恩方の人々の温かい出むかえを受け、ふるさとのすばらしさを楽しみと感^あじるのでした。

雨紅が童^{どう}ようを書き始めたのは二十一歳のときで、現^{げん}在^{ざい}の荒川^{あらかわ}区^くにあ^あった第三^{だいさん}日^{にっ}暮^ぼ里^り尋^{じん}常^{じょう}小^{しょう}学^{がっ}校^{こう}（現^{げん}在^{ざい}は、第三^{だいさん}日^{にっ}暮^ぼ里^り小^{しょう}学^{がっ}校^{こう}）へ転^{てん}勤^{きん}したころです。当時の人々の生活は豊^{ゆた}かではなく、毎^{まい}日^{にち}の暮^くらしも困^{こん}難^{なん}なじようきようでした。そこで、雨紅は子どもたちの心^{こころ}を少しでも豊^{ゆた}かにしようと思^{おも}い、仲間^{なかま}とともに文集^{ぶんしゅう}や童^{どう}話^わ、童^{どう}ようの歌^か詞^しを書^かき始^{はじ}めたのです。

ふるさと八王子の数々の思い出は、雨紅の心の中^{こころ}からいつもはなれませんでした。そして、その中^{なか}の一^{ひと}つに、家^{いえ}に帰^{かえ}るた^たびに目^めにしたあの夕

暮れの風景があったのです。それは、自然の豊かさだけでなく、心にうったえかけるような何かすばらしいものがあるからです。

「あの感動を子どもたちに伝えたい。」

それは決して八王子の中だけではなく、日本中の人たちにも通じるすばらしさのはずだから――。

そう考えた雨紅は、『夕焼け小焼け』を作詞しました。彼の心かれがこもったこの詞しに美しい曲がつけられ、広く人々の心にしみわたっていき、今もなお親しまれているのです。

夕焼け小焼けで 日が暮れて

山のお寺の 鐘かねが鳴る

お手々みなつないで 皆みな帰る

からすと一緒いっしょに 帰りましよう

子どもが帰った 後あとからは

円い大きな お月さま

小鳥が夢を 見るころは



空にはきらきら 金の星

(宇津木 孝充 作 「夕焼け小焼けの里

―中村雨紅―」から一部引用)

(堀田 直樹 作)

江戸深川（江東区）

四百年ほど昔のことです。深川八郎右衛門は、摂津の国（今の大阪府あたり）から仲間といっしょに江戸（今の東京）にやってきました。そのころの江戸は、まだ住む人が少ないところでした。

八郎右衛門たちは、摂津によく似た海辺に小屋を建てました。（みんなで楽しく暮らせる村を作りたいものだ。）

しかし、海の近くは人里からも遠く、しめった土にあしがおいしげっています。雨が降れば、すぐにぬかってしまうような土地です。

あらしがくると高波もおしよせてきます。住みよい土地にすることは大変です。八郎右衛門たちは、毎日、日の出から起きだして、星がかがやくまで働きまわりました。石を集めて海をうめたて、のびほうだいの草をかき、土を運んで田畑を作りました。

八郎右衛門たちの力で、小屋の近くも少しずつ人が住めるようになりました。しかし、なかなか作物がとれるようにはなりません。

ある日のことです。みんなが仕事を終えたころ、小太郎が、八郎右衛門の所にやってきて言いました。

「わたしは、毎日、あせびっしりになって石を運んで海をうめたてています。一日の仕事が終わるともうくたくたです。けれども、草をかつている人たちはどうでしょう。わたしの仕事に比べたら、なんと楽なことか：。わたしは、もう石運びをしたくありません。」

それを聞いた八郎右衛門は、小太郎を連れて外に出て言いました。

「ご覧なさい。わたしたちがここに来たころと比べてどうでしょう。家が建ちました。田畑も少しできました。これは、みんなの力が一つになってできたことですよ。小太郎さんがいっしょうけんめいに石を運んでくれたおかげです。」



八郎右衛門の話聞いた小太郎は、あた辺りの様子をながめました。建ちはじめた家からは、夕げのけおりが立ちのぼっています。小太郎はその様子をじっと見つめていました。

しかし、小太郎は、次の日から一人で小屋にこもるようになりました。小太郎がぼんやりねころんでいると、入り口の戸をたたく音がします。戸を開けると、佐吉さきちがかきの実をもって立っていました。

「八郎右衛門さんから、病気だと聞いたが、ぐあいはどうだ。わたしは、草かりだが、おまえは石運びだ。さぞつかれることだろう。ほら、かきの実だ。これを食べ、せいを出しな。」
そういうと、かきを三つさしました。



かきの実を受け取ろうとした小太郎は、佐吉の手を見てはっとしました。佐吉の手は土色で傷だらけです。

「佐吉、どうしたんだ、その手は……。」

「草かりはどうしても草で手を傷つけてしまっただ。なあに、あしをかき終えるまでのしんぼうさ。」

そういうと、佐吉は仕事にもどりました。小太郎は、佐吉の後ろ姿をいつまでも見送っていました。

その夜、小太郎は八郎右衛門の所に出かけて言いました。

「力を合わせて働けば、もっとよい土地になりますね。作物も実りますね。わたしは、もうひとがんばりしようと思います。」

八郎右衛門は、大きくうなずくのでした。

ある年の秋のことです。八郎右衛門たちの小さな田が黄金色に染まりました。いねが実ったのです。八郎右衛門たちが江戸に移り住んで、初めての豊作でした。

「八郎右衛門さん、豊作ですよ。あしではないですよ。いねがこんなに実ったのですよ。」

小太郎たちは、手を取り合って喜びました。八郎右衛門の目から、な

みだが流れ、黄金色の田がかすんでいくのでした。

徳川家康が江戸に幕府を開き、江戸城に入りました。あるとき、家康は八郎右衛門の土地の近くにかりに出かけました。案内役は八郎右衛門でした。家康は、八郎右衛門にこの土地の名前をたずねました。しかし、まだ名前がありません。家康は、八郎右衛門の努力を認め、この土地の名前を八郎右衛門の名字からとってはどうかと言ったのです。こうして、八郎右衛門たちが開いた土地は「深川」とよばれるようになりましした。深川（今の江東区あたり）は、それからどんどん発展し、今では、東京を代表する下町の一つになっているのです。

（赤堀 博行 作）

トラベリングと口玉の山（江戸川区）

*トラベリング
バスケットボールのルールの一つ。ボールを持って三歩以上歩くとトラベリングとなる。

「あれは絶対トラベリングじゃない。」

隆史は興奮気味に叫んだ。バスケットボールの江戸川区中学校新人大会の決勝戦の直後のことだった。決勝戦は、最後まで一点を争う白熱したものであった。残り十秒、隆史のA中は、一点負けていたが、隆史がディフェンスを素速いステップで抜いてシュートを決めた。隆史の得意技のステップ・インだ。

「やった。逆転だ。」

と隆史たちが喜ぶのと、ほぼ同時に、

ピー。

という強い笛の音。そして、

「トラベリング。ノー・バスケット。」

という審判の声。隆史のステップ・インはトラベリングと判定され、ゴールは認められず、一点差のまま試合は終わった。

ステップ・インは、隆史がずっとこだわって練習してきたものだ。ドリブルをしてディフェンスの前でストップした次の瞬間、一步踏み出して素早くディフェンスを抜いてシュートを打つステップである。今までの試合でもこのステップ・インで何点もとってきた隆史の得意技だ。

「どうしてあれがトラベリングなんだ……。」

隆史は独り言のようにつぶやいた。

決勝戦から一週間たった頃。江戸川区では区大会の上位三校が都大会の出場権を得る。A中は準優勝なので、十一月下旬から始まる都大会に出場できる。

「区大会の疲れもとれただろう。都大会に向けて調子を上げていこう。」

顧問の先生がそう言って励ました。

しかし、隆史は今ひとつ練習に集中できない。キャプテンの義男がディフェンス（守り）で、隆史がオフフェンス（攻め）で練習をしていた。隆史が打ったシュートを義男が見事にブロックした。義男が額に汗を光らせながら言った。

* 篠原儀治氏
大正十三年
十一月十四日
生まれ。

昭和十二年
頃よりガラス
職人である父
に師事し、江
戸時代から伝
わる宙吹きと
いう技法(型を
使わず空中で
形を整える技
法)を継承した。

江戸風鈴の
名付け親であ
り第一人者で
ある。江戸川
区無形文化財
指定、名誉都
民(平成十六
年顕彰)。

「少し遅れたから、おまえのステップ・インでやられたと思ったぜ。どうしてステップ・イン、使わなかっただ。」

「……。」

隆史は何か言い返そうとしたが言葉が出てこなかった。

そんなある日。隆史は家で、インターネットを使って調べた夏休みの宿題のレポート『江戸風鈴』を見直していた。隆史のA中では、総合的な学習の時間で「江戸川区を知ろう」というテーマを掲げている。夏休みにそれぞれの生徒がテーマを選んでレポートにまとめ、二学期にグループに分かれて校外学習に出かける。隆史は、夏休みに調べた『江戸風鈴』の工房に、明日、見学に行くことになっていた。

江戸風鈴とは、昭和三十年代になって、風鈴製作の第一人者篠原儀治氏が、江戸時代から伝わる宙吹きという技法で作られたガラス風鈴を『江戸風鈴』と命名したものである。今では都内に二か所しかない工房の一つが江戸川区南篠崎にある。

簡単に読み返していたが、あるところに目がとまった。それは江戸風鈴の篠原儀治氏がまだ十代のとき、仕事を一通り覚えた頃のことを述べているところである。親方である父の指示で、儀治氏は腕の立つ職人吉村清吉氏と組んで仕事を始めた。

風鈴は、玉取りたまとといって、三センチメートルくらいの小さい玉(風鈴の口になる部分)をつくる職人(口玉職人)。そして、そのうえにもう一度ガラスを巻き取り、ふくらまして風鈴にする職人(本職)。通常この二人が組んで、風鈴を作る。私が玉取り、清吉が本職という具合に組んだ。ところが、清吉は私が作った口玉を見ては目の前で切り落としてしまう。ちくしょうと思いつつながらまた口玉を作るのだが、それも目の前で切り落としてしまう。切り落とされた口玉で山ができた。小さいころから父の仕事を見よう見まねで覚え、年は若い(十三、四歳)仕事は一人前と思っていたから、だんだん腹が立ってきた。私も生意気盛り、「なぜこの口玉では、駄目だめなんですか。」と食ってかかった。しかし清吉は、悠然ゆうぜんとした様子で私を見つめた。目の中で、「こんな口玉で風鈴が吹けるか。」と言っている。怒っているでもなく、諭さとしているでもなく、職人としての意地

が私を見つめている。「親方の長男だからといって、俺は甘くはしないぞ。」と言っているのだ。

「口玉の山か……。」

隆史は、無意識につぶやいていた。すると、突然、
ピーー。

と、あの笛の音が聞こえたような気がしてハッとした。そして、それまではベッドに横になりながらレポートを読んでいたが、体を起こし、レポートを強く握り直して続きを読み始めた。

初日はさんざんたるものだった。物心がつく前から火の前に立ち、父の手伝いをしていた私をひとつも清吉は認めなかった。それは負けず嫌いの私の心に火をつけた。

次の日から夜勤の職人の仕事が終わると、すぐに掃除をはじめ、ガラスくずひとつないようにきれいにし、水を打って、清吉の出勤を待った。このころの癖が七十七歳の今でも、私にほうきを持たせている。清吉は工場の戸を開けた瞬間目を光らせていたが、表情は一切変えず、着物姿にたすきをかけ、炉の前に立った。私は昨日とは違い、口玉の吹き方を一つ一つ変えてみた。もともと風鈴はガラスの厚さを均一には作らない。ガラスが薄いと厚いと厚いところを吹き分けてその違いが音に出てくるのだ。初めは昨日のように均等に丸く、玉子型、細長く、先のほうを厚く、元のほうを厚く、自分なりに考えつく限りいろいろなものを作り、清吉に渡した。今、清吉との戦いに勝つには、どのような口玉を求めているか、それを探ればよいことに気がついたからだ。昔の職人はどうか、こうとかあまりうんぬん言わない。こちらでそれを探し出すのだ。

始めのうち清吉は「この未熟者め。」と思ったに違いない。くる玉くる玉がすべて違うのだ。職人というのは、同じ品質のものがいくつでも同じように作れるのが良いとされる。それがすべて違うとなれば言語道断である。そんな感じで、ここ数日は初日と同じ口玉の山ができた。

名人といわれた職人を、年若い私と組ませたことに失敗かなと思いはじめたころ、じっと見ていた清吉が私の口玉で風鈴を作り出した。子供の私にとってこのときの感激は今も忘れることができな。清吉が私を認めた瞬間だったからである。

「口玉の山。」

レポートを読み終わると隆史はもう一度確認するように言った。

次の日、外はそろそろ北風が吹き始めようとしているのに、江戸風鈴の工房は暑かった。それもそのはず、ガラスを溶かす炉は千三百度をこえるという。この工房で機械を使わず昔ながらの技法で一日に三百〜四百個を作るのだ。

隆史たちもガラス吹きをやらせてもらった。職人さんがやると簡単そうに見えるのだが、なかなかうまくいかない。

「けっこう難しいだろ。一人前になるには十年くらいはかかるかな。」

職人さんが笑って言った。

できた風鈴に絵付けをしていると、インターネットで見た篠原儀治さんが奥から出てきた。隆史は、「この人が篠原さんか」と思い、ドキドキしながら黙って風鈴に向かっていた。すると、篠原さんから声をかけてきた。

「音を鳴らしてごらん。見かけをきれいに仕上げるのも難しいが、きれいな音を出すのも難しいんだ。息を吹きこむ加減でガラスの厚いところと薄いところを作るんだ。あと、この縁がギザギザだろ。このギザギザがあるから、振り管が少し触れただけでもきれいな音が鳴るんだ。」

チリン、チリーン。

透き通るような音色が染みわたる。

「この歳になってもやりたいことがたくさんあってな。風鈴の音で音階を作れないかと思ってね。メロディを奏でる風鈴作りに挑戦しようと思ってるんだ。あとを継いだせがれたちと競争だ。」

そう言うと篠原さんは、若者のように大きな声で笑った。

「少年よ、君たちは、今、何かに挑戦しているかね。」

思わず隆史は立って答えていた。

「は、はい。トラベリングの山ができてでも負けません。」

* 振り管
風鈴の内部
につり下げら
れている管。
風に吹かれる
外側の風鈴本
体にぶつかり
音が鳴る。

「江戸しぐさ」を考える―めぐりに乗って―（台東区）

平成十八年四月、台東区循環バス「めぐりん」に東西めぐりんが登場しました。これで東西南北全ての「めぐりん」が開通・運行することになりました。「めぐりん」はレトロな色調の約二十人乗りの小さな車体で、裏通りの商店街も走る台東区民の足代わりになっているバスです。

私はかわいらしい色と形をした「めぐりん」が大好きで、よく利用します。バレー部の活動を終えて疲れて帰るとき、「めぐりん」の運転手さんが「こんにちは。」と声をかけてくれます。なんだかほっとした気持ちになって乗っていると、運転手さんは乗客の一人一人に「こんにちは。」「走ります。おつかまりください。」と言ひ、車内に気を配っています。正直言ってあいさつされることに最初は戸惑いましたが、今では私も「お願いします。」とあいさつするようにになりました。不思議なことにあいさつをするのとは違うのでは、乗っているときの気分が違うのです。そのことに気付いてから、私は自然にあいさつができるようになりました。

ある雨の日、私は友人と二人、後ろの方の席に座って話をしていました。一人のお婆さんが乗ってきました。雨で車内の床は滑りやすく、「危ないな。」と思った瞬間、友人はさっと立ち、お婆さんに「こちらにどうぞ。」と言ひながら手をさしだしていました。素早い友人の行動に目を見張られると同時に、何もできなかった自分を恥ずかしく思いました。

こんなこともありました。この日車内は満員で、私も一人、つり革につかまり立っていました。ある停留所で、お婆さんと中年の女性が乗ってきました。その時、私の前の座席が空いたので、お婆さんに席を譲ろうと思ひそのまま立っていると、目の前の席に後ろの方からどさっとバックが放り投げられました。あっけにとられて見ていると、後ろの席に座っていた女性のグループと中年の女性とが知り合ひだったらしく、続いて、「○○さん、こっちこっち、席空いているから。」と大きな声がとんできました。私は思わず、「どうしてお年寄りに席を譲らないのですか。」と口にしてしまい、その場の空気が凍りついたようになってしまいました。

私は「めぐりん」での出来事を考えるうち、校内弁論大会で「江戸しぐさ」について、次のような発表があったのを思い出しました。



「江戸しぐさ」

江戸時代は、一六〇三年から三百年近く続いた世界でも類を見ない平和で落ちついた時代です。江戸の町に住んでいた人たちの間には、「江戸しぐさ」という言葉で語り継がれた行動様式がありました。「江戸しぐさ」は、「商人（あきんど）しぐさ」とも呼ばれていましたが、江戸商人の考え方、口のきき方、表情から身のこなし方など、人とうまくつきあっている術をまとめた「生き方の知恵」ともいえるものです。江戸の人たちは、「読み・書き・そろばん（計算）」のような勉強ももちろん大切にしていましたが、人と接するときのマナーやエチケットをより重要と考えていました。なぜなら、「江戸しぐさ」を身に付けることで人との関係がよくなり、平和な町や国をつくることができると思えていたからです。そして、このような「江戸しぐさ」を身に付けた人を見て、江戸の人たちは「粋（いき）な人」として尊敬とあこがれをもち、誰もが「江戸しぐさ」を身に付けるように努力していました。

私たちは、朝「おはようございます。」と言われたら、「おはようございます。」と応えます。あいさつされてあいさつをかえすのは現代でも当然のことだと思えますが、「江戸しぐさ」では、相手の身分や立場に関係なく、どのような人も平等に接することが求められました。ですから、どのような人にも、こちらからあいさつをすることが大切だったのです。

江戸時代は狭い路地が多く、人口も多かったので、道で人とすれ違うときには気を遣ったのだそうです。例えば「江戸しぐさ」の中の一つである「傘かしげ」は、雨や雪の日、狭い路地で人と行き交うときに、傘を外側に傾けて、すっとすれ違うものです。

こうすることで、互いの体に雨や雪のしずくがかからないようにしました。また、江戸時代の傘は「番傘」といって、紙に柿の渋を塗って水をはじくようにしたもので破れやすかったため、傘がぶつからないように気遣ったのです。「傘かしげ」のような行動は、相手に対する思いやりがなければできないものだと思います。

このように、相手のことを考えた行動をしてもトラブルになることがあります。みなさんは、人ごみの中で足を踏まれたり、ぶつかられたりして、その相手が謝りもせず立ち去ってしまい、「ムカツ」と感じたこ

とはありませんか。「江戸しぐさ」では足を踏んでしまった人が「どうも失礼しました。」と謝り、踏まれた人も「こちらこそ、うかつでした。」と、さっと謝ることが「粋」であり、よいこととされてきました。これを「うかつあやまり」といいます。「足を出していたこちらこそ失礼しました。」と気まずい思いをしている相手を思いやる言葉をかけたのだそうです。足を踏んでしまった方も踏まれた方も、互いに謝り合うことで言い争いやけんかにはならず、すがすがしい気持ちでいることができます。日常的にこのような行動が行われることで、江戸の人たちはみんな穏やかな気持ちになって、平和でよりよい社会が創られていったのではないのでしょうか。

大田区の「矢口の渡し」や葛飾区の「矢切の渡し」などが有名ですが、江戸時代には川を渡るために渡し舟がありました。もし、渡し舟に乗客がたくさん乗っていたところへ、あとから舟に乗せてほしいという人が来たら、私たちならばどうしていたでしょう。「もう満員だよ。」という態度で知らんぷりしているか、「次の舟にしてください。」と言うでしょうか。江戸時代では、このようなときに「**「ぶし腰浮かせ」**」という行動をとるようになっていたそうです。舟に乗っている人たちがこぶし一つ分腰を浮かせて詰めることにより、あとから来た人を座れるようにするものです。誰かが言い出すのではなく、船に乗っている人たちが自ずと腰を浮かせるのです。だから、後から来た人も気兼ねすることなく座ることができたのです。現在に置き換えて考えてみると、席がうまっている電車で、「もう少しつめれば、あと一人座れるのに。」というときを想像してみてください。寝たふりをする人、新聞を読んで気付かない振りをしている人を目にしませんか。全員がさっと腰を浮かせて席を詰めるようなことはまずありません。

「江戸しぐさ」についていくつか紹介しましたが、江戸時代には、このような「江戸しぐさ」が八百種とも八千種あるとも伝えられていて、江戸商人を中心に語り継がれてきました。現在の社会では、私も含めて自己中心的な人が多く、江戸時代の人たちから学ぶべきことが多くあると思います。江戸時代には人への気遣いや思いやりがあり、社会全体に、みんなが守るべきマナーやエチケットが、しっかりと根付いていたと思います。だからこそ江戸時代の人たちは気持ちよく平和な時代を過ごせることができたのでしよう。一方、現在は、電車のドアや通路に座り込み、通行の邪魔になっている人や携帯電話をかけたたり、化粧をしたりしてい

る人を見かけます。江戸時代と比べると、寂しく残念な世の中だと思えます。だからこそ、もういちど先人の時代を振り返り、「江戸しぐさ」のような良き伝統を未来に引き継いでいく必要があるのではないかと思います。

私は、あらためて考えてみました。

私たちは家族・友人に限らず多くの人とともに支え合って生きています。だからこそ周囲の人に「思いやり」の心を持ち、その心を行動にうつすことが、大切だと学びます。しかし、ともするとバスの中で知人のために席を横取りした中年女性のような行動をとってしまうことはないでしょうか。相手が誰だとかは関係なく、また、人にほめられようとしているのではないからこそ「めぐりん」の運転手さんも友人もすてきなのです。これが江戸しぐさの「粋」といわれるものかもしれないと思いました。

(宇津木 美佐子 作)



小さな工場の大きな仕事（大田区）

僕の家は、大田区の羽田という場所にあります。羽田というと羽田空港の都会的なイメージがあるかも知れませんが、小さな工場が建ち並ぶ古い町です。僕の家も工場で、一階が作業場になっていて、金属を削る機械が二台置いてあります。仕事の内容は、自動車の部品などの金属に機械や自分の手でやすりをかけ、正確に磨き上げるといいうものです。僕は、コンピュータの入った機械なのだから、

「手を真っ黒にしてやすりをかけなくても、正確な部品が作れないのかな。」
と、いつも疑問に思っていました。父は社長ですが、社員は母と二十歳になる兄、それに職人さんが二人です。二階には家族の住まいがあり、祖父を含めた五人が暮らしています。うす暗く、油のにおいに囲まれた作業場で、朝から晩まで働いている姿を見て、僕はある仕事はしたくないと思っていました。どうせ働くなら、もっときれいな職場で、お金がたくさんもらえる、かっこいい仕事に就きたいと考えていました。

僕の学校では二年生が職場体験をすることになっていて、僕は、コンピュータソフトの会社に行くことになりました。その会社は僕の家のすぐ近くにあり、大きなビルは、見慣れたものでした。

「ゲームソフトの会社に、職場体験することになったんだ。」

僕は、黙ったまま横で作業を続けている父の顔をちらっと見ながら、母に言いました。母は、
「それはよかったねえ。」

と、笑顔で答えてくれました。

「これがかっかけて、就職できたら最高なのになあ。」

僕は、つい本音を言ってしまった。

「うまくいくといいねえ。」

と、母は少し寂しそうにつぶやきました。それを聞いていた兄は、

「そんなうまくいくはずないだろう。」

と笑っていました。そして、

「自分の将来は、じっくり考えて自分で決めろよ。後悔しないようにな。」

と、額の汗をタオルでふきながら独り言のように言いました。

「兄さんは、後悔しているの？」

と聞きたくありませんでしたが、やめました。三人が話をしている間も、父は、何かの部品を時おりライトにかざして見ながら、やすりをかけて磨き続けていました。そんな父を横目で見ながら、僕は、二階の自分の部屋に駆け上がりました。

部屋に入って、インターネットでゲームソフトの会社を調べるために、パソコンの電源を入れました。なぜなら職場体験をする会社について、自分で調べ、まとめないといけないからです。会社の名前を入力し、検索キーを押しました。会社概要には「資本金六百億円」「従業員三千人」と出ていました。関連会社は、外国を含め数え切れないほどあり、ゲームソフトの他、様々なソフトも作っていることが分かりました。僕は、

「すごいなあ。」

と、ため息をつきました。そして、レポートのために必要な情報をプリントアウトし、その紙を見ながらまとめていきました。

翌日から、いよいよ職場体験です。僕は、母に、

「明日は早めに行きたいから、いつもより早く起こしてね。」

と伝えました。母は、

「分かったよ。」

と答えました。僕は、部屋に戻って明日の準備を始めました。会社では案内係の手伝いを行う予定なので、服装には特に気を配りました。

そして、職場体験当日、朝食をすませ、会社に向かって家を出ようと思いました。すると、僕の後ろから、

「弁当作っておいたから、持っていくんだよ。」

という母の声が届いてきました。見ると一階の作業台の上に、ハンカチで包まれた弁当箱が置いてありました。僕は、大きな会社に弁当を持って行って食べることに迷いました。機械油のにおいが付いているような気がして恥ずかしく思えたからです。僕は、母が作ってくれた弁当を手にとってしばらく考えましたが、再び作業台の上に戻し、「行って来ます。」
と言って、家を出ました。

八時少し前に会社に着きました。会社に着くと担当の人が出迎えてくれました。

「今日は、会社の案内係をしてもらいます。会社に来た人の目的はそれぞれ違います。この案内板を参考に、尋ねられた部署を案内してください。案内係の社員がいますので、一緒に行動してください。」

という説明を受け、いろいろな部署の名前とその部署がある階数が記載されている案内板を受け取りました。僕は案内係の人と一緒に一階の受付窓口に行き、仕事を始めました。一日受付にいるいろいろな人が訪問することが分かりました。別の会社の人、見学に来た人、ゲームソフト販売店の人、いったい何人ぐらいの人が来るのだろうか。案内係の人は部署を聞いただけで、

「はい、総務部ですね。四階になります。」

と、すぐに答えていました。僕は、エレベーターまで案内することで精一杯なのに、まるで案内板が頭に入っているみたいでした。コンピュータのソフト会社なのに、思っていた仕事とだいぶ違うなど感じました。でも、一つの会社でも、ソフトを売る仕事、宣伝をする仕事、ソフトを作る仕事など、たくさん職種があって成り立っているんだなあと思いました。

昼食は、会社の食堂に行き、食べました。午後も午前と同じ仕事を行い、あっという間に一日が過ぎていきました。慣れない仕事で思っていたよりも疲れました。よく考えると一日中立っていたことも忘れていました。

その日の夕方、僕は、棒のようになった足を引きずるようにして、家に着きました。

「ただいま。今、帰ったよ。」

と言うと、兄が、

「おれのお昼は、お前の置いていった弁当になったんだぞ。」

とすぐに言ってきました。見ると作業台の横に弁当を包んでいたハンカチが、無造作に置いてありました。僕は、朝の出来事をまったく忘れていましたが、一度に思い出しました。そして、朝は母に申し訳ないことをしたと思ひ、「朝はごめん。弁当を持って行かなくて。」

と言うと、

「いいんだよ。」

と作業をしながらこっちを見ずに答えました。すると、横で作業を続けていた父が、黙って何かの部品を差し出しました。その部品は、緩やかな曲線を描き、ピカピカに磨かれていました。僕が、

「何の部品だろう？」

と見て見ていると、

「それはなあ、ロケットの部品なんだ。人工衛星を宇宙へ打ち上げるためのロケットさ。」

と兄が教えてくれました。僕は、

「へえー。」

と、つぶやきながら、部品に映った自分の顔をながめていました。

「いつかこの部品を使ったロケットが宇宙に飛んで行って、人工衛星を地球の外へ運ぶんだ。そして、地球の雲の様子を調べたり、自分の位置を確認したりできるんだぜ。つまり、天気予報やカーナビゲーシオンに活用されるってわけだ。」

「そんなすごいものが、何でうちの工場にあるの？」

「それはなあ、うちの工場がすごいからだよ。コンピュータや機械だけでは、この部品は作れないんだ。どうしても人間の手作業が必要になるんだ。うちの親父は、この仕事のプロで百分の一ミリまで正確に磨くことができるんだぞ。これはどんな機械を使ってもできないんだ。機械やコンピュータだけがすごいんじゃないだろ。」

兄が話している間も、父は部品を磨いては手にとって感触を確かめる作業を続けていました。しばらくして、普段は無口な父が、つぶやくように言いました。

「おれはなあ、中学を卒業して、すぐに工場で働き始めた。高校へ行きたいとか、あの仕事に就きたいとか、そんなことを言える環境ではなかった。毎日、毎日、鉄を磨いて、思い通りの部品が作れるようになるまで二十年ぐらいかかった。でもな、この手で作ったものが、世の中の役に立っているのは、うれしいものだぞ。」

長年見慣れた父の姿でしたが、今日の父はいつもと違って見えませんでした。そして、油の染み込んだ黒い手が、誇らしく見えました。



(宮澤 一則 作)

海苔の町 — 大森 — (大田区)

「さあ、どうだい！ 日の出寿司自慢の巻き寿司だよ。」

「やっぱり日の出寿司の巻き寿司は、最高に美味しいよ。」

義之は大きな声をあげていた。

中学校一年生になる義之は、大田区大森東に住んでいる。寿司が大の好物で、今日も父にせがんで家族で町の老舗である日の出寿司に来ていた。

「寿司のおいしさは、新鮮な魚貝類とシャリに加え、海苔の味にかかっているんだ。」

日の出寿司の主人である岡崎さんは熱く語り始めた。

「岡崎さん、大森の名物と言ったらやっぱり海苔だね。」

義之の父が言うと、カウンター席に座っていた西村さんが、

「その通りだ。」

と大きくうなずいた。

西村さんは大森でタウン誌の編集長をしていて、義之の家族とも顔なじみである。

「へえー、西村さん、大森の海苔って有名なんだ。」

「そうか、義之君は知らなかったのか。」

西村さんは少しがっかりした表情を浮かべた。

「海苔はね、ここ大森から全国に広がったんだよ。」

西村さんは義之に、海苔の歴史を話し始めた。

「海苔の養殖は、今から三百年前の江戸時代に始まったんだ。江戸時代中期には、日本一の生産高を誇っていたのが大森村、つまりこのあたりだったんだよ。大森の海苔はたいそうおいしく評判を呼んで、将軍家にも献上されて、『御膳海苔』と呼ばれていたんだ。」

「そんなにおいしかったんだ。」

義之は身を乗り出した。

「それだけじゃないぞ。」

今度は岡崎さんが話し始めた。

「海苔の養殖は、海にヒビと呼ばれる竹や木の枝を立てて、そこに付着した海苔を摘み取り、和紙をすく要領で

紙のように薄くするんだ。この技術を大森に住む野口六郎左右衛門という人が考え出し、全国に広めていったんだよ。」

「つまり、大森の海苔があったから、今の日本の食卓に美味しい海苔があるというわけだ。」

西村さんは誇らしげに付け加えた。

「それに義之君、この町をよく見てごらん。海苔屋さんがいっぱいあるだろう。」

西村さんに言われてみて、美原通りの商店街や産業道路沿いに海苔屋がいくつもあることに義之は気がついた。

「あっ、そうだ、海苔屋さんもあるけれど……、小学校に海苔をつくる道具が展示されているのを見たことがあるよ。」

「うん、学校に神社やお寺、この町のいたるところに海苔の歴史が刻み込まれているんだ。この町はいい町なんだよ。」

岡崎さんはしみじみと語った。

岡崎さんも西村さんも自分のことのように、大森の海苔の歴史を話していることに義之は驚いていた。そして、何だかとてもうれしく感じられた。

「大森ってすごいんだなあ。」

義之の口から思わず言葉がこぼれていた。

「それじゃあ岡崎さん、この巻き寿司の海苔も、大森の町で作られたのですね。」

義之は目を輝かせて尋ねた。

「残念だけれど、この海苔は大森で作った海苔ではないんだ。大森ではもう海苔は作っていないんだよ。」

「えっ。」

西村さんの話から、昭和三十年代の高度成長期に工場排水によって海の汚染は進み、さらに東京オリンピックを前にして、東京湾の整備計画により東京湾は次々と埋め立てられ、昭和三十八年三月に三百年にわたる大森での海苔の生産はなくなった。現在は海苔の善し悪しを見極める技術を活かして、八十軒ほどの海苔問屋が大森にあることを義之は知った。

義之は、それではせっかくの伝統が消えてしまったように思えてならなかった。

義之の顔を見て、西村さんは、

「まあ、そんなに不満そうな顔をするなよ。」

と言ったが、義之にはどうしても納得がいかなかった。

「確かに海苔の生産の灯は大森の町から消えてしまった。……けれど大森の人々の海苔を愛する心は、この町に今

もずっと生き続けているんだ。一週間後に君に見せたいところがある。」

岡崎さんは西村さんの顔をちらりと見ると、義之に笑顔で言った。

一週間後、義之は岡崎さんに連れられ、小舟が浮かぶ運河沿いの小道を歩いていた。

あの日から義之は、岡崎さんの言った、

「大森の人々の海苔を愛する心は今もずっと生き続けている。」

という言葉が気になっていた。

「今日は義之君に見せたい場所があって、特別に許可を得ているんだよ。」

小道を通り抜け、『工事中』と書かれた看板の中に立ち入ると、義之は目を見張った。

「こんな場所があるなんて……。」

義之はしばらく何も言うことができなかった。

真っ白な砂浜、一面に広がる海、そこにあるのはまぎれもない浜辺であった。よく見ると、ハゼやボラが勢いよ

く泳いでいる。向こうの浜辺ではユリカモメが羽を休めている姿も見えた。

あまりにもひっそりとたたずむその景色は、見慣れている大森の町並みとは別の世界のように義之には思えた。

「岡崎さん、確か堤防があったと思うのだけど……。」

この場所は、内川が海に注ぎ入るあたりであったことを、義之は思い出していた。

「そうだね。内川の河口、護岸があった場所だ。でも今は海苔を養殖していた大森の海を再現してつくった人工

の浜辺なんだ。六年前に着工し、来年やっと『大森ふるさとの浜辺公園』として町の人々に公開されることになっ

たんだ。しかし、このふるさとの浜辺をつくるまでには、二十数年の年月がかかっているんだよ。」

「二十数年も……。」

義之は、その長い年月に驚いた。

「義之君、もしこの海がなくなるとしたら君はどう思うかい。」

「えっ、そんな……そんなのいやだよ。」

義之は、目の前にある海がなくなるなんて考えもつかないように思えた。

「二十数年の間には、このあたり一面を埋め立てる計画があったんだ。その時の大森の人々の思いも、義之君の思

いと同じだったんだよ。」

岡崎さんは思い出すように言った。

「時代の流れによって、大森の海苔の生産の灯は消えてしまった。そのことはとても残念なことだ。……けれど、

大森の町の人々にとって海苔を養殖していた海や浜辺はいつまでも変わらないふるさとだったんだね。だからこそ、その思いや願いが形となって、ここにふるさとの浜辺をつくったんだ。」

義之は、海をじっと見つめる岡崎さんの横顔に、長い年月にわたるふるさとへの深い思いがにじみ出ているように思えた。

「この浜辺を、うれしいときに訪れ、悲しいときに心が癒されるそんな場所にしたんだ。」
岡崎さんは力強く言った。

義之は、岡崎さんが以前に言った、

「海苔を愛する心が生き続けている。」
という言葉葉を、今しっかりと感じていた。

「おい、義之君。」

振り向くと西村さんが浜辺の向こうに立っていた。

「この浜辺には海苔の資料館が、平成二十年にできることになったんだよ。あそこに見える区の建物を改築し、さらにその隣には新しい建物もできるんだ。」

西村さんは建物の方を指さして、うれしそうに言った。義之は西村さんが、この浜辺に海苔の資料館をつくるために奔走していたことを初めて知った。

「資料館には、重要文化財に指定されている道具や海苔船を展示することになっているんだ。海苔の道具は、ふるさとの浜辺にあるのがふさわしいだろう。」

「ふるさとの浜辺で、大森の海苔の歴史をみんなに伝えていくのですね。」
義之は少し自慢げに言った。

「ああ、その通りだよ。義之君にもわかるようになったんだな。」
西村さんは、義之に自分の思いが伝わったことを喜んでいた。

「海苔の資料館では、みんなに海苔の養殖をしてもらいたいと思っっているんだ。水質という課題はあるが、いつかきつとこの大森の海で再び海苔をつくり、みんなに食べてもらいたいと思うんだ。その時は岡崎さん、おいしい巻き寿司を頼むよ。」

「もちろんだ。大森の海苔を使った巻き寿司を、義之君に一番に握るからな。」

「はい、お願いします。」
海を見つめる義之の心の中には、この町への熱い思いがあふれていた。



(鮫島 千恵子 作)

麗しの歌舞伎座（中央区）

「この度、歌舞伎座は老朽化、バリアフリーへの対応を理由に、劇場本体を高層ビルに建て替える方針を発表しました。」

突然のテレビニュースでした。亜紀、中学二年、平成十七年十一月のことです。

六年前、小学校二年生の夏休み――。

父と娘で出かけた初めてのアニメーション映画。両親が豚に变身させられ、主人公の少女が働くことになる風呂屋のシーンになったとき、

「あっ。私達の住んでいるマンションの裏の建物みたい。」

と、亜紀は歓声を上げました。

「そんな風に考えたことがなかったけれど、言われてみれば似ているね。」

父も亜紀の言葉にうなずいたのでした。

それからです。亜紀が歌舞伎座に興味を示すようになったのは。

「それで、あの建物は何をするとところなの？」

「お芝居をする所なんだよ。」

「ふーん。どんな？」

「江戸時代の町民や鎌倉・室町・江戸時代の武士を主人公にしたお話が多いんだよ。」

「亜紀も一度見てみたい。」

「よし、それでは、一緒に見に行こう。」

歌舞伎好きの父にとって、娘が興味を示したことがとてもうれしく感じられました。亜紀が小学校中学年の頃から、月に一度は一緒に一幕だけでも歌舞伎見物をするようになりました。

幼いながらも、『勧進帳』、『助六』など、いわゆる『歌舞伎十八番』の筋書きも理解するようになっていったのです。

しかし、中学生になると、銀座通りに面したところは近代的なビルが多く都会的なのに、晴海通りに面したこの



* 勧進帳
* 助六
* 歌舞伎十八番
歌舞伎の有名な演目。

歌舞伎座は古めかしくて、なんだか嫌だなど思うようになっていました。年頃になり、おしゃれにも関心が高まってきた亜紀にとって、四丁目界隈のファッションビルの方が素敵に映りました。何でも新しくきれいな方が新鮮でよく感じられるのです。それに、毎月一幕は見ている歌舞伎なのですが、小柄な亜紀には十分な座席でも、大人の人たちには窮屈に感じる座席です。特に、日本の観光に来ていた外国の人たちにとってはとても狭い座席なのです。

(こんな所では、世界に誇れる歌舞伎を楽しんでもらえないじゃない。)
(いっそ歌舞伎座も近代的な高層ビルに建て替えた方が良いのかもしれない。)
と思ったこともしばしばありました。

中学二年生の六月、シンガポールからカレンという十六歳の女の子が、夏休みを利用して亜紀の家にホームステイにやってきました。亜紀はカレンと仲良くなれるだろうか、また自分の英会話を通じるだろうか、とても不安に思っていました。しかし、カレンの人なつつこさと明るさに助けられ、またたく間に仲良くなることができました。

ただし、カレンの質問攻撃にはいささか閉口させられました。

「歌舞伎の由来は何ですか？」

「上演中にかかるかけ声は何ですか？」

カレンは、せっかく日本にきたのだから、日本について深く教えてほしいと願っていました。しかも、歌舞伎座のこんな近くに住む亜紀の家に来ることにわくわくしていたのです。カレンは自国に誇りをもっており、何でも説明ができました。特に、カレンの住んでいるテロック・アヤ地区はシンガポールでも歴史的に意味の深い寺院が多く建ち並ぶ伝統ある地域であり、シンガポール最古の中国寺院があることが最大の自慢でした。だから、亜紀に質問するのは当然のことだったのです。亜紀は日本人として、また東銀座の住人として、何も知らない自分を恥ずかしく感じました。

その夜から、亜紀はインターネットで歌舞伎の歴史を調べました。少しでもカレンの質問に答えられるようにと願って。

歌舞伎のはじまりは、*出雲の阿国(おくに)という女性が一五九八年に「ややこ踊り」という子どももの踊りを踊って人気を得たことからです。「歌舞伎」という言葉は、「傾く」(かぶく)という言葉が語源です。これは、常識をはずれたもの、型破りなものを意味しています。この頃、エネルギーにあふれた若者達の中に、派

* 出雲の阿国
の創始者。
出雲歌舞伎

手な着物を着て奇抜な髪型や持ち物を身に付けて、町を闊歩する者たちがいて、彼らのことを「傾き者」（かぶきもの）と呼んでいました。阿国がそのような風俗を取り入れて、派手な着物を着て踊ったのがはじまりでした。

調べているうちに、（それでは、歌舞伎座の歴史はどうなんだろう。）という疑問が亜紀の心にわいてきました。ちよっと前まで、歌舞伎座の座席に不満を感じていたことも忘れ、夢中になって調べました。カレンを誘って取材にも出かけました。いつも、開幕前に観客の整理をしているはっぴを着た男の人に聞くことにしたのです。「歌舞伎座の歴史について知りたいんですけど。」

「私かい？」

「はい、いつも会場前にお客さんと話をしたり、会場準備をしたりしている姿を見て、歌舞伎座について教えてほしいと思ったんです。私は、歌舞伎座の裏のマンションに住んでいる吉沢亜紀と言います。彼女は、私の家にホームステイしているカレンです。」

「おじさんは、中村屋さんに馴染みが深く、中村恵吉と言います。あっしに分かることなら何でも聞いておくんなさい。」

はっぴ姿がとても板についている方でした。亜紀は、自分が感じていることを話し始めました。

「私はカレンから歌舞伎についてあれこれ聞かれました。でも、自信をもって答えることができず、日本人として、また、この地域に住む者としてとても恥ずかしく思いました。だから、歌舞伎や歌舞伎座についてちゃんと知りたかったのです。」

亜紀の言葉と真剣な眼差しを意気に感じて、中村恵吉さんは話し始めました。

「この建物はね、明治の演劇改良運動の流れを受けて建てられたんだよ。それまで一番大きかった新富座を超えて、一番大きい劇場としてこの歌舞伎座が建てられたんだ。明治二十二年のことだよ。」

「へーっ。その時の建物がそのまま残っているんですか？」

「いやいや、そうじゃないよ。大正十年に漏電で火事になっちゃったんだ。その上、大正十二年再建工事中に、関東大震災に見舞われてしまう。ようやく大正十四年に新築されるんだが、昭和二十年に東京大空襲で大屋根が落ち、内部が燃えてしまっただ。昭和二十六年に再興して現在にいたっているんだ。」

「この歌舞伎座にも、長い歴史があるんですね。」

「建物の造りは桃山様式と言ってね、安土桃山時代の建築スタイルなんだ。歌舞伎を上演する建物としては最もふさしい様式なんだ。平成十四年には、国の登録有形文化財に指定されたんだよ。」

* 桃山様式
安土桃山時代
の華やかな
建築様式。

* 中村屋
歌舞伎役者
中村勘三郎お
よびその一門
の屋号。

* 登録有形文化財

有形の文化財で歴史上または芸術上価値の高いもの。

「歴史があるんですね。」

「そうですね。歴史と伝統を大切にしつつ、私達歌舞伎座に働く者は頑張ってるんだよ。」

「私にとって歌舞伎座は小さい頃から近くにあるのが当たり前で、その素晴らしさも何もかも分からないでいました。今、お話を聞いて、改めて歌舞伎座の価値を知ることができました。ありがとうございます。」

亜紀は、心から中村さんに感謝しました。

亜紀は、中村さんの言葉に勇気をもらいました。だから、カレンが帰国した後、「歌舞伎座が建て替えられる。」というニュースを聞いたとき、驚いてばかりはいられないと思いました。そして、古くからのごひいきの父と一緒に歌舞伎座の副支配人を訪ねました。

「先日のニュースで歌舞伎座の建て替えの件が報道されましたね。」

「座席の狭さや耐震面での心配もあって発表したのですが……。ニュース後の反響がとても大きかったので驚いています。」

副支配人は丁寧な応対をしました。そして、

「現在、改修工事の具体的な日程は決まっていません。歌舞伎座の外観を残しながら内部の改修工事だけを行う方法も検討しています。」

と言葉を続けました。（大好きな歌舞伎座の姿が保存されるかもしれない。）という言葉に、亜紀は少し安堵しました。

幼い頃から当たり前のように、自宅の近くにあった歌舞伎座。桃山様式風の威風堂々とした姿に守られているような気がします。小学校の入学式の日も、中学生になったあの日も歌舞伎座の正面玄関で記念撮影をしました。亜紀にとって歌舞伎座は、憩いの場であり、心のよりどころでもあります。「麗しの歌舞伎座」とでも言うべき存在なのだと思えて感ずるのでした。

しかし、先日のニュースにもあったように、歌舞伎座の改修工事がどのようにされるかははっきりしていません。地域に住む一人として、歌舞伎の伝統を継承していくために何ができるのか、どうしていけばいいのか、考えていきたいと思っています。

（坂口 幸恵 作）

第二章 郷土資料の活用



たかおの 山やまの てんぐ（八王子市）

一 ねらい

よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行おうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、八王子市の高尾山にまつわる話である。都内にある高尾山には、毎日たくさんの方の登山者が訪れ、行ったことのある子供も多い。その高尾山には、悪いことをしないでんぐがいたという話が伝わっている。また、一夜にして根が丸くなった「たこ杉」と呼ばれる杉の木が今も残っている。このように、子供達にとって身近な郷土を素材にした資料のため、興味をもってねらいに迫ることができる。また、よいことを進んで行い、悪いことをしなかったてんぐは、ねらいを達成するには効果的である。

三 指導上の留意点と工夫

- ・てんぐの気持ちに共感させるために、てんぐのお面などを使って発表させると効果的である。
- ・3―(1)の動植物愛護の価値も含まれているので、導入では「よいことと悪いこと」に視点を置いて、ねらいからはずれないようにする。また、展開前段では、てんぐの気持ちに共感させながら、多様な価値観を引き出したい。

学習活動	指導上の留意点
1 よいことと悪いことについて話し合う。 ○ 「よいこと」「悪いこと」にどんなことがあるか。	・ねらいとする価値に目を向けさせる。
2 資料「たかおの 山 <small>やま</small> の てんぐ」を読んで話し合う。 (1) 山に登ってくる人を見て、てんぐはどんなことを考えたか。 ・ 登ってくる人を応援したい。 ・ 何か手伝うことはないかなあ。 (2) 真っ赤な顔をもっと真っ赤にしたてんぐは、どんなことを考えたか。 ・ 登ってくる人をどうしたら助けることができるのかな。 ・ 杉の木は切らない方法はないかなあ。 (3) 地面を掘っても杉の木が抜けず、てんぐはどんなことを考えたか。 ・ もうやめたい。 ・ なんとかしたいけど、疲れてやめたい。 ・ 登ってくる人のためにがんばって続けよう。 (4) 道のはずれに杉の木が立ち、登ってくる人が転ばなくなって、てんぐはどんな気持ちだったか。 ・ いいことをしたなあ。	・山に登ってくる人のために、応援してあげようとするてんぐの考えに共感させる。 ・登ってくる人を助ける方法がなくて困っているてんぐの考えに共感させる。 ・杉の木が抜けず、てんぐがいろいろと考えながら地面を掘っていることに共感させ、多様な感じ方や考え方に気付かせる。 ・よいことを進んでしたあとの充実感や満足感に共感させる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今までよいと思うことを進んで行おうとしたことやできなかったことはあるか。そのとき、どんな気持ちだったか。	・今までの自分の行為を振り返り、自己を見つめさせる。
4 教師の説話を聞く。 ○ よいことと悪いことを区別して行動した体験談を話す。	

あいさつ通り（国分寺市）

一 ねらい

気持ちのよいあいさつ、動作などに心がけて、明るく接する心情を育てる。

二 資料選定の理由

・学校周辺の地域では、子供達が健全に成長していくために多くの取り組みをしてきている。国分寺市青少年北地区では、あいさつの励行に取り組み、主に学校周辺に看板を取り付けている。この看板には、地域の大人たちから模範を見せてあいさつをかわし、子供達にも実践してもらいたいという思いがこめられている。国分寺市の学校を題材とした本資料を、それぞれの地域で活用することで、子供は身近に感じ、興味・関心をもって学習できるものと思われる。

三 指導上の留意点と工夫

- ・おじさんにあいさつをしたときの気持ちを、役割演技を通して考えさせる。
- ・本資料では国分寺市を題材にしているが、児童自身が自分たちの地域を振り返る活動も効果的である。
- ・このころのノートの『あいさつはこころのリボン』を紹介するなど、このころのノートを活用する。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 あいさつの言葉について話し合う。</p> <p>○ どのような「あいさつの言葉」を知っていますか。</p> <p>・ おはよう。さようなら。ただいま。いただきます……。</p>	<p>・ あいさつを板書する。</p>
<p>2 資料「あいさつ通り」を読んで話し合う。</p> <p>(1) おじさんのところを走って通りすぎてしまったときは、どんな気持ちだったか。</p> <p>・ おじさんは、苦手だな。</p> <p>・ あいさつしたほうがいいかな。</p> <p>(2) 先生から「あいさつ通り」の看板の話聞いたとき、としくんはどんなことを考えたか。</p> <p>・ いつもあいさつしてるよ。</p> <p>・ あのおじさんにあいさつしてないや。</p> <p>・ あのおじさんにもあいさつをした方がいいのかな。</p> <p>(3) おじさんにあいさつをしたとき、何で胸の奥がすっきりしたのか。</p> <p>・ あいさつをして気持ちがよかったから。</p> <p>・ 気持ちのよい返事が返ってきたから。</p>	<p>・ おじさんを苦手としているとし君の気持ちに気付かせる。</p> <p>・ 「あいさつ通り」の看板の写真を掲示する。</p> <p>・ 役割演技でとし君の気持ちを考えさせる。おじさん役を教師が行う。</p>
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ あいさつをして気持ちがよかったのは、どんなときか。</p> <p>・ 毎朝、「おはよう」のあいさつをしている。</p>	<p>・ 導入で出されたあいさつを確認しながら体験を想起させる。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p> <p>○ 「こころのノート」『あいさつはこころのリボン』を紹介する。</p>	

ようこそ はな子さん（武蔵野市）

一 ねらい

身のまわりの生きものに親しみをもち、優しい心で接していこうとする気持ちを育てる。

二 資料選定の理由

・昭和二十九年以来、東京都井の頭自然文化園で飼育されている象のはな子は、子供達の人気者である。
 ・象のはな子と飼育係のおじさんとのふれあいを通して、動物に親しみをもち、身のまわりにいる動植物にも目を向け、優しい心で接しようとする気持ちを育てることができる。

・現在・過去・現在の時間構成となっている。数十年の間、温かい交流を深めてきたはな子と飼育係のおじさんの間には、たくさん思い出がある。みぞに落ちたはな子をひき上げたり、やせ衰えていくはな子を助けようと研究をしたりして、今日にいたった。はな子とおじさんとの心の交流を通して、生命あるもの大切さや尊さ、そして、生きものと共に生きることのすばらしさに気付かせる。

三 指導上の留意点と工夫

・生活科等で育てている生き物の観察をし、成長の喜びを味わわせる。
 ・身近な生き物への手紙を教室に掲示したり、実際に読んだりして、一人一人のよさを紹介する。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 身のまわりの生きものに触れて、感じたことや考えたことを発表し合う。 ○ 今までにどんな生き物を育てたり飼ったりしたことがあるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・植物や動物に目を向けさせ、板書する。
2 資料「ようこそ はな子さん」を読んで話し合う。 (1) おじさんは、どんな気持ちで毎朝はな子にえさをあげているのか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 今日もおいしく食べてくれるかな。 ・ 今日もうえにがんばろうね。 (2) はな子がみぞに落ちたとき、おじさんはどんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ あっ、もう、だめかな。 ・ 早く助けるから、がんばれよ。 (3) はな子の歯が一本しか残っていないことを知ったとき、おじさんはどんなことを思ったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ごめんよ、こんなになるまで知らなくて。 ・ 一本の歯で食べられる方法はないかな。 (4) おじさんはどんな気持ちで、はな子にお祝いの歌を歌ったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ お前と一緒にすごせて、うれしいよ。 ・ これからも、お互い元気でいような。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ はな子は二歳半のときにタイの国からやってきたこと、みぞに落ちたとき、干草等で段を作り、はな子の前足にロープをかけて、その段を上らせたこと、象の歯は抜けかわるが、抜けかわるべき歯がもうなくなったこと、4人で一時間以上かけて、整腸剤入りのバナナジュースを使った流動食を作っていること等を、補足説明するとよい。 ・ ふき出し等を黒板にはり、おじさんの気持ちを書かせる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 育てている生き物にどのようなことをしたか。また、そのときの気持ちはどうだったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 導入の板書を生かす。
4 身のまわりの生き物に手紙を書く。	

うえの先生と ハチ (渋谷区)

- 一 ねらい
 美しさや清らかさに触れて感動する心を育てる。

二 資料選定の理由

- ・ 本資料は渋谷区郷土博物館に所蔵されている「ハチ公 文献集」(編者 林正春)を参考文献としている。
- ・ 渋谷駅にあるハチ公像は有名である。そのハチと飼い主である上野先生の心のきずなを描いた資料である。
- ・ 互いに深い愛情で結びついた、温かく美しい話に子供達は感動できる。先生の愛情がいかにわかりであったかは、感じ取ることができる。また、ハチがいかに先生のことが好きであったかも共感できると考える。帰らぬ先生を待ち続ける悲しい話ではあるが、ハチと先生の心のきずなは子供達の心を揺り動かすであろう。
- ・ ハチのはく製は、国立科学博物館に保管されており、先生とハチの墓は青山霊園にある。

三 指導上の留意点と工夫

- ・ 導入では、駅前のハチ公像の写真などを提示して興味をもたせる。
- ・ 発問は読後の感動を大切に、子供達と共に話し合いたい場面を決めてもよい。(展開例参照)

学習活動	指導上の留意点
1 ハチ公像を紹介し、資料へ興味をもたせる。 ○ この犬の像のことを知っているか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハチにまつわるどんな話があるのか、興味を高め、資料への導入を図る。
2 資料「うえの先生と ハチ」を読んで話し合う。 (1) どこが一番心に残ったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ハチが亡くなった先生を待ち続けるところ。 ・ 先生が急に死んでしまったところ。 (2) 先生が急に亡くなってしまったところに心が動いたのはなぜか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ハチをすごくかわいがってくれた大好きな先生だから。 ・ おなか痛いときも、こわいときもいつもやさしかった。 ・ お母さんが死んでしまうような気持ちになった。 (3) 駅で先生を待ち続けるハチはどんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 先生に会いたいよう。寂しいよう。 ・ どうして帰ってこないのかな。 ・ 今日こそ帰ってくるかな。帰ってくるまで待ち続ける。 (4) 天に昇ったハチに、先生はどんな言葉をかけて迎えただろうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 何十年も待ってくれてありがと。会いたかったよ。 ・ 空から心配して見ていたよ。年をとったね。可哀想に。 ・ やっとまた会えたね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読後の感動を大切にする。 ・ 感想を出し合い、みんなで話し合ってみたい場面を考える。 ・ 先生が深い愛情でかわいがっていたこと、ハチも先生が大好きだったことなどにふれながら、二人が離れ離れになってしまった悲しさを想像させる。 ・ 年をとっても駅に通い続けたハチの、先生を慕う気持ちを話し合う。 ・ 寂しい気持ちで待ち続けたハチの思いが報われる、やさしい言葉を引き出すようにする。
3 自分の生活を振り返る。 ○ 美しい話に感動したり、心を洗われたりしたことはあるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読んだ本や映画等、感動したものの名前と、どんなところに感動したかを紹介し合う。
4 教師の説話を聞く。	

おじぞうさま (豊島区)

一 ねらい

父母、祖父母を敬愛し、家族の役に立とうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、豊島区巢鴨にある「とげぬき地藏尊」の名で親しまれる高岩寺境内の「洗い観音」を題材として創作されたものである。お母さんに早くよくなつてほしいと願う「わたし」の気持ちに触れさせながら、ねらいとする価値の自覚を深めていく。

・児童の道徳性の基盤の一つとして家庭は重要である。その家庭において身に付ける道徳性が、様々な集団とのかかわりの基盤を築くと言えよう。自分を見守ってくれる家族の存在に気付かせ、敬愛する気持ちを育てるとともに、家族の一員として役に立とうとする気持ちを育てる。

三 指導上の留意点と工夫

- ・場面絵を用いて児童のイメージを豊かにする。
- ・動作化を取り入れて、登場人物の気持ちを考えやすくする。
- ・展開例の自分の生活を振り返る活動では、時間を十分取ることが有効である。じっくりと考えられるようワークシートに書かせることも有効である。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 家族っていいなと思った経験について話し合う。 ○ 家族っていいなと思ったことにどんなことがあるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいとする価値に目を向けさせ、児童の興味・関心を高める。
2 資料「おじぞうさま」を読んで話し合う。 (1) 肩が痛むお母さんを「わたし」はどんな気持ちで見ているか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ かわいそうだ。早く治るといいな。 ・ 私にできることはないか。 (2) おばあちゃんからおじぞうさまの話を聞いて「わたし」はどんなことを考えたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ お母さんのために行ってみよう。 ・ お母さんの肩が治ってくれるといいな。 ・ おばあちゃんも、お母さんのことを心配しているのだな。 (3) おじぞうさまを「わたし」はどんなふうにしたのか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 力を込めて一生懸命、ていねいに。 ・ お母さんのことを考えながら。 (4) 「わたし」はどんな気持ちから、おばあちゃんのこともお願したのか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 一緒に来てくれてありがとう。 ・ 家族のことを思ってくれてありがとう。 ・ いつまでも元気でいてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母を心配する「わたし」の気持ちに共感させる。 ・ 母のことを思い行動に移そうとする「わたし」に共感させるとともに、同じような思いでいる祖母の存在に気付かせる。 ・ 洗う様子を動作化させ、心の中でどんなことを思ってどのように洗ったのかを問いかけ、「わたし」の母を思う気持ちに共感させる。 ・ 家族を見守る祖母に対する「わたし」の親愛や感謝の気持ちに共感させる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 家族のことを思ってやっていることはあるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の発言から、様々な体験があることに気付かせる。
4 教師の説話を聞く。	

玉川上水と玉川兄弟たまがわじょうすい たまがわきょうだい（羽村市）

一 ねらい

自分でやろうと決めたことは、ねばり強く最後までやり通そうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、実在した人物の話をもとにつくられたものである。玉川上水の羽村の堰には、堰を完成させた兄弟の功績を讃えるものとして「玉川兄弟像」が建てられている。実在した人物を題材とした本資料を活用することで、児童は興味・関心をもって学習できるものと思われる。

・いくつもの困難を乗り越え、情熱を失わずに玉川上水をつくりあげた兄弟の思いや生き方を通して、最後まで頑張り抜く大切さを教えてくれる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

- ・導入では、玉川兄弟の像の写真を示し、資料への興味・関心を高める。
- ・兄弟が、ねばり強く苦心を重ねながら玉川上水を完成させた過程を想像できるような発問を工夫すること
- ・児童が玉川兄弟の思いや考えに共感するようにする。
- ・展開後段では、今までの自分を振り返る時間を十分に、これからの生活に生かせるようにする。

学習活動	指導上の留意点
1 現在の玉川上水の様子と、玉川兄弟の像について知る。 ○ 玉川上水と玉川兄弟を知っているか。	・写真を提示する。
2 資料「玉川上水と玉川兄弟」を読んで話し合う。 (1) 工事を引き受けたとき、兄弟はどんな気持ちだったか。 ・江戸の人たちのために力になりたい。 ・頑張って工事を成功させよう。 (2) 2度も失敗し、夜も眠れなくなった兄弟の心の中はどうだったか。 ・どうしたらいいんだ。 ・もう、だめだ。 ・何か方法はあるはずだ。あきらめてなるものか。 (3) 家を売ってまで工事を続けようとした、兄弟はどんな気持ちだったか。 ・自分で決めたことだから、最後まであきらめたくない。 ・江戸の人のためには、工事をやめるわけにはいかない。 ・ここまでやったのだから、頑張っ続けていたい。 (4) 江戸の人たちや農民の姿を見て、肩を抱き合ったとき、兄弟はどんな気持ちだったか。 ・完成してうれしい。 ・最後まであきらめないでよかった。 ・みんなに喜んでもらえて幸せだ。	・江戸の人々のために、自分でやろうと決めたときの気持ちを考えさせる。 ・目標を達成するために困難に出会ったときの心の中を考えさせ、兄弟の葛藤に気付かせる。 ・頑張りたい、願いをかなえたいという、兄弟の強い気持ちに気付かせる。 ・やろうと決めたことを最後まであきらめないでやり遂げたときの喜びに、共感させる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今まで、自分で決めたことを最後までやり遂げたことはあるか。そのときの気持ちはどうだったか。	・今までの経験を振り返り、多くの児童が発言できるようにする。
4 教師の説話を聞く。	

全校遠足とカワセミ（杉並区）

一 ねらい

友達同士互いに助け合い高め合いながら、よりよい友達関係を築いていこうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・ 中学年は、気の合う友達と仲間集団を作り出す時期である。交友範囲も広がり、仲間意識も発達するが、時には友達に流されてしまったり、友達の悪い行為を見逃したりすることがある。そこで、友達同士、互いに教え合い、友情を育てていこうとする心情を養う。

・ 本資料では、友達からの誘いに心が揺れ、葛藤する主人公の姿が描かれている。本当の友達とはどんな友達なのかを考えることを通して、友情を深めていく大切さを教えてくれる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・ 導入では、この資料の中で大切な役割を果たしている「カワセミ」を紹介することで、資料への興味・関心を高める。

・ 「おさむ」の心の変化や葛藤を共感的に考えさせる。
・ 展開後段では、仲のよい友達との接し方について自分自身を振り返らせる。注意し合ったり教え合ったりしたことだけでなく、そのときの気持ちも併せて想起させ、よりよい友達関係を考えさせる。

学習活動	指導上の留意点
1 「カワセミ」を紹介する。	・ 写真を用いて、美しく貴重な鳥であることを伝える。
2 資料「全校遠足とカワセミ」を読んで話し合う。 (1) 公園に行く途中、たけしから「カワセミ」を探しにいく話を聞いたおさむは、どんなことを考えたか。 ・ カワセミってどんな鳥か見てみたいな。 ・ たけし君と一緒にカワセミを探してみたいな。 (2) たけしに耳打ちされてから鬼ごっこが始まるまでの間、おさむはどんなことを考えていたか。 ・ たけし君と一緒にいったら先生にしかられる。 ・ みんなに迷惑のかかることはやってはいけない。 ・ 断ったらたけし君にきられてしまうかもしれない。 ・ 仲良しでいたいから、まちがったことはできない。 ・ 友達なんだから、行くのをやめさせたい。 (3) 鬼から逃げながら、おさむはどんな気持ちをもったか。 ・ 勇気を出して言ってよかった。 ・ たけし君は大切なぼくの友達だ。	・ 仲のよい友達といっしょに話をしたり行動したりする喜びに共感させる。 ・ 葛藤している主人公の心情をより深く考えさせる。 ・ 勇気を出して友達に注意をし、それを快く受け入れてもらえた喜びをおさえる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 友達同士、注意し合ったり教え合ったりしたことがあるか。それはどんな気持ちからか。 ・ 友達が廊下を走っているとき危ないから注意をした。 ・ 宿題を見せてと言われたが、断り、そのかわりヒントを教えてあげた。見せることは友達のためにならないから。	・ 友達を思いやり、信頼するとともに、時には注意したり教えたりすることも友情を深めるためには大切であることを、自分自身を振り返らせ、考えさせる。
4 教師の説話を聞く。	

野鳥のすむ水辺みずべ（西多摩郡奥多摩町）

一 ねらい

自然のすばらしさに感動し、自然や動植物を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・自然の中で遊んだり、動植物とふれ合ったりする機会を多くもつことで、子供達の心に生きとし生けるものへのいたわりの心や親しみの心、慈しみの心がはぐくまれていくものである。しかし、近年の自然環境悪化とともに、自然体験の楽しさを味わう機会が減少してきている。そこで、子供達が身の回りの自然に目を向け、自然のもつ美しさやすばらしさに感動するとともに、かけがえのない自然や動植物を大切にしようとする心を育てていくようにする。

三 指導上の留意点と工夫

- ・ つり糸の実物を用意して、からまった様子を子供達が理解しやすいように提示する。
- ・ 人間の身勝手によって、時として生き物の命を奪ってしまうことに気付かせる。
- ・ 展開後段で、学校や地域で自然を守る活動に参加したことがある子供達に、そのときの様子や感想等を発表させ、実践意欲を高める。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 本時で学習することをつかむ。</p> <p>○ 「自然って美しいな、すごいな。」と思ったことがあるか。</p>	<p>・ テレビや新聞等で見聞きしたことも含めて発表させ、資料への興味・関心を高める。</p>
<p>2 資料「野鳥のすむ水辺」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 奥多摩の溪流を見て、わたしはどんなことを感じたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家の近くの多摩川と同じ川だとは思えない。 ・ すごく水がきれいで、生き物もたくさんいて、驚いた。 <p>(2) つり糸にからまってしまったアオサギを見たとき、わたしはどんな気持ちになったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人間のせいでアオサギが苦しむなんてひどい。 ・ つりをする人はマナーを守ってほしい。 <p>(3) 「水辺は鳥たちにとって生きていく上で、とても大切な場所だ。」という父の言葉から、わたしはどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生き物が安心して過ごせるよう、家の近くの多摩川を少しでもきれいにしたい。 ・ わたしたち人間にとっても水辺は大切な場所だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多摩川の上流部の様子が分かりやすいように、写真やビデオ等を効果的に活用する。 ・ 足にからまってしまったつり糸を切っているときのアオサギの様子にも触れながら考えさせる。 ・ 主人公の自然を大切にしようとする意欲の高まりをおさえる。
<p>3 自分の生活を振り返って話し合う。</p> <p>○ 「自然って大切だな。」と感じたことがあるか。自然を壊さないようにするために、自分たちでできることはあるか。</p>	<p>・ 自分のできる身近なことについて、自然だけでなく、人の行動や心の在り方にも広げて考えさせる。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p> <p>○ 自然の大切さを感じた教師の体験を語り聞かせる。</p>	<p>・ 学区域の周辺で見つけた自然のすばらしさや自然を守る活動をしている人の行為を見て感心したなどの話をする。</p>

日曜日のバーベキュー（あきる野市）

一 ねらい

集団や社会の中でみんなが気持ちよく生活するために、約束やきまりを進んで守ろうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・秋川の河原は、豊かな自然が美しく、週末になると、つりやバーベキューを楽しむ人々にぎわう。ところが人々が帰った後は、ごみが散乱している現状がある。以前に比べると、ごみの持ち帰りの意識は高まっているが、現在、行政による清掃やごみの回収作業が行われている。「東京の大切な自然」を守ることを通して、規範意識について考えさせることのできる資料である。

三 指導上の留意点と工夫

・約束やきまりは守らなければならないことは誰でも分かっているが、時として、守れないことがある。主人公が会う生活の場面を通して、公共物とのかかわりや、社会生活の中で守るべきルールについて考えさせることが大切である。役割演技や母の自転車のごみごみを見たときの気持ちを想像させることで、「約束やきまりを守らないとどのような気持ちになるのか。」に気付かせ、ねらいとする価値のもつ意味を考えさせる。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 学校や社会での約束やきまりを思い起こす。</p> <p>○ 学校や社会ではどんな約束やきまりがあるか。</p>	<p>・ねらいとする価値に目を向けさせ、本時への課題意識を高める。</p>
<p>2 資料「日曜日のバーベキュー」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 「気持ちのよい一日をすごした。」とありますが、なぜそう思ったのですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 川や緑が美しかったから。 ・ 自然の中で仲間と楽しく過ごしたから。 <p>(2) 立て札の前で2人はどんな話し合いをしたか。</p> <p><ぼく></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ みんなは守ってなくても、自分たちは守ろうよ。 <p><みきお></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これだけ捨ててあれば、自分たちが拾っても大して変わらないよ。 <p>(3) 二つのごみのことから、ぼくはどんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 悪かったな。ごみを持って帰ってくればよかった。 ・ 自分勝手な捨て方が人を不愉快にさせるのだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然の中で感じた爽快感が、ごみによって不快感に変わっていったことをおさえる。 ・ 役割演技を通して葛藤する気持ちを考えさせる。 ・ ワークシートを活用する。 ・ 約束やきまりを守らないと、自分も他人も不快であることに気付かせる。
<p>3 自分の生活を振り返る。</p> <p>○ 約束やきまりを守ったことはあるか。また、守れなかったことはあるか。そのときの気持ちはどうだったか。</p>	<p>・ ごみ以外に考えを広げられるよう、導入での発言を思い起こさせる。</p>
<p>4 「心のノート」『やくそくやきまりを守るから仲よく生活できる』を読んで考える。</p>	

くじら祭まつり (昭島市)

一 ねらい

郷土の文化と伝統を大切にし、郷土を愛する心を育てる。

二 資料選定の理由

・ 中学年では、地域での活動範囲が広がる。この時期に、地域の自然や文化、お祭りや伝統を大切にし、郷土を愛する心を育てていく。

・ 本資料では、昭島市で行われている、地域に密着したお祭りを題材にしている。くじらという、子供達にとって親しみやすいマスコットが登場することから、子供達の興味・関心を高めることができる。また、この資料をきっかけとして、自分たちの地域のことを考えさせることができる。

三 指導上の留意点と工夫

・ 写真等の視聴覚教材を使い、資料の理解を助ける。
 ・ 主人公の郷土に対する心の変化を共感的に考えさせる。
 ・ 展開後段では、自分たちの地域の自然や文化、お祭りなどの伝統を想起させるとともに、それらに対して自分はどうにかかわってきたのか、またどんな思いをもっているのかを振り返らせるようにする。

学習活動	指導上の留意点
1 自分たちの町について想起する。 ○ 住んでいる町の良いところ、自慢できることにはどんなことがあるか。	・ お祭り、自然、建物など、子供達から自由な意見がでるようにする。
2 資料「くじら祭」を読んで話し合う。 (1) 友達のゆう君にくじら祭の話聞いたとき、ぼくはどんな気持ちだったか。 ・ おもしろい名前のお祭りだな。 ・ どんなお祭りなのだろう。早く行きたいな。 (2) お祭りを見ているぼくは、どんなことを考えていたか。 ・ 楽しそうなお祭りだな。 ・ どうして「くじら祭」という名前なのだろう。 ・ もっとお祭りのことを知りたいな。 (3) くじら祭りのことを調べて、ぼくは何を考えたか。 ・ お祭りはみんなのためのものだったんだな。 ・ みんな、昭島が好きなんだろうな。 (4) 窓から町を眺めているぼくは、どんなことを考えたか。 ・ 昭島が好きになったから、来年はぼくも出たいな。 ・ とてもすてきな町だな。引越ししてきて良かった。	・ 初めてのくじら祭に、興味と期待をもつ主人公の気持ちを想像できるようにする。 ・ 実際にお祭りを見て、祭りのことをもっと知りたいと変化していく気持ちに気付かせる。 ・ お祭りには、ただ単に楽しむだけではなく、よりよい町にしようという願いが込められていることに気付かせる。 ・ 自分も町に住む一人として、町に愛着をもつ気持ちになったことに気付かせる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 自分たちの地域の中で、大切にしてきた自然や文化、お祭りにはどんなものがあるか。また、自分はどのようにかわってきたか。 ・ 秋にはお祭りがある。ずっと続いていくといいな。参加もしていきたい。 ・ 地域の清掃活動を続けていきたい。	・ 地域の自然や文化、お祭りなどに対する自分自身の思いやかわりを振り返らせる。
4 教師の説話を聞く。	

波浮のお池（大島町）

一 ねらい

目標の実現に向かって、希望と勇気をもって最後までやりとげようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・伊豆大島の南端には、火山の噴火でできた火口に水がたまった波浮のお池があった。地震で海とつながったものの、入口付近は外輪山の縁にあたり、岩と浅瀬で船の出入りができなかった。かねて商売で伊豆の島々をまわっていた秋広平六は、人々の暮らしの困難さに心を痛め、炭焼きの技術やじゃがいもの栽培などを教えていた。あるとき、波浮のお池の沖で船が難破する現場に出会ったことから、ここを港として切り拓く決意をした。その後、一生をかけて波浮の港村の発展に尽くしたという実話をもとに本資料が作られた。

・つげのくしを扱う商人だった平六が、幕府を説得して工事に踏み切らせ、見事に完成させた。その裏には、十年に及ぶ努力と学習の日々、困難を乗り越える強い意志の力があつた。そんな平六の姿から、夢をもち、その実現に向かって勇気をもって進んでいくことの大切さを感じ取らせるようにする。

三 指導上の留意点と工夫

・終末では、現在の波浮の港の写真や中山晋平作曲「波浮の港」の曲などを用いて、余韻をもって終わらせることも効果的である。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 伊豆大島を紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ・伊豆大島に関心をもち、資料への意欲付けを図る。伊豆大島や波浮のお池の位置、島の様子などを伝える。
2 資料「波浮のお池」を読んで話し合う。 (1) 船が難破した様子をじっと見ていた平六が、ぎゅっと手を握りしめたとき、どんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ かわいそうに。ここが港だったら助かっていたらうらやま。 ・ ようし、なんとかして、ここを港にしてやるぞ。 (2) どうしても大岩を取り除くことができず、腕組みをしてうなづいてしまった平六は、どんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ どうしよう、これで工事もおしまいか。 ・ 何かいい方法はないものだろうか。 ・ あきらめるものか。絶対にやってみせるぞ。 (3) 平六の目が、朝日を浴びてキラリと光ったとき、どんな気持ちだったか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 完成して本当によかった。 ・ とうとうやりとげたぞ。うれしいな。 ・ これでみんなも喜んでくれるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大仕事をやろうと決心をし、高い目標をもったときの気持ちを考えさせる。 ・ 目標に対して困難にぶつかったときの揺れ動く気持ちを考えさせる。話し合う中で、多様な感じ方や考え方に気付かせるようにする。 ・ 目標の実現に向かって、希望と勇気をもって最後までやりとげたときの喜びに共感できるようにする。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 自分で立てた目標をがんばってやりとげたことはあるか。そのとき、どんな気持ちだったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の体験を想起し、そのときの気持ちについても振り返らせる。
4 教師の説話を聞く。	

心にふく風(千代田区)

一 ねらい

礼儀の大切さに気付き、誰に対しても心のこもった接し方をしようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・ たくさんの人々が集まる首都東京。その東京は今ホテルの開業が続いている。従業員と客という立場があるにせよ、つかの間にかかわる知らない者同士でも最低限の礼儀が必要なのではないか、という問題提起を含んでいる資料である。東京は電車に乗っても街を歩いても、知り合いではない人ばかりである。だからこそ、人と人が気持ちよくかかわるための礼儀作法があることに気付かせ、その大切さについても考えさせる。

三 指導上の留意点と工夫

- ・ 導入では、ねらいとする価値への方角付けをする。
- ・ 男の子の行動と、女の子の行動を善悪の判断だけではなく、心のこもった礼儀が生み出す、気持ちのすがすがしきについても話し合わせる。
- ・ 展開後段では、「言葉遣い」「あいさつ」からさらに踏み込んで「帽子を取る」「両手で受け取る・差し出す」等、相手を尊重する様々な礼儀作法があることに気付かせる。
- ・ 本資料は、2―(2)の視点からの指導も考えられる。

学習活動	指導上の留意点
1 ねらいとそれにかかわる体験を想起する。 ○ 礼儀正しい人に接して気持ちのよかったことはあるか。	・ねらいとする価値への方角付けをする。
2 資料「心にふく風」を読んで話し合う。 (1) 絵里さんの心の中に寒い北風が吹いたように感じたとき、どのようなことを考えたか。 ・ 悲しいが、仕事だからしかたない。 ・ 「ありがとう」くらい言ってもいいのではないか。 (2) 南風が吹いたときの心の中はどうだったか。 ・ 自分のことを尊重してくれているのだな。 ・ 気持ちよく仕事ができてうれしい。 (3) 絵里さんは「違い」を通して、どんなことを考えたか。 ・ 一人の人間として大切に接してくれることはうれしいし、互いに気持ちのよい時間を過ごせる。 ・ 誰に対しても礼儀をつくすことは大切。	・「北風が吹いたとき」「南風が吹いたとき」を黒板の上下段に書き分け、対比できるように板書を工夫する。 ・ 男の子の行動と女の子の行動を善悪の判断だけではなく、礼儀作法が生み出すものについて考えさせる。
3 自分の生活を振り返る。 ○ 心を伝える形には他にどんなものがあるか。 ○ 自分が礼儀正しくできたことはあるか。そのときの気持ちはどうだったか。	・「言葉遣い」「あいさつ」以外の礼儀作法についていくつか話し合った後、「心のノート」を読んでさらに広げる。 ・ ワークシートを活用する。
4 教師の説話を聞く。	

半助の投あみはんすけ（調布市）

一 ねらい

謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にしようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・調布市の南側を流れる多摩川は、かつては東京郊外の実地として、遊びに訪れる都民が多かった。現在に比べて、水質がよく多くの魚が生息していた。そのため、魚をとって生計を立てていた人も多かった。

本資料は、今からおよそ一〇〇年前のことで、多摩川とそこにかかわる人々の様子を描いたものである。万七と半助の立場の違いに着目させ、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすることの意味について考えさせる。

三 指導上の留意点と工夫

・資料を理解しやすくするために、多摩川の地図、アユ、ウグイ、オイカワなどの魚の絵や写真などを提示すると効果的である。また、投網の難しさを実感させるためにも、ビデオを使って投網の様子を見せたり、実際に体験したりする工夫も考えられる。

・発問を構成する場合は、異なる立場を理解させるために、万七の立場だけに共感させる場合や、万七と半助の両方の立場に共感させる場合など、児童の実態などを考慮する。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 「広い心」とは、どのような心か話し合う。 ○ 「広い心」とはどのような心か。 ・ 優しい心。 ・ 許す心。	・「広い心」とは、どのような心なのかを考えさせ、ねらいとする価値への方向付けを行う。
2 資料「半助の投あみ」を読んで話し合う。 (1) 半助の網打ちを見た万七は、どんなことを考えたか。 ・ いつ見ても下手だなあ。 ・ 早く上手になってもらわないと困るなあ。 (2) すまなそうな半助を見て、万七はどんなことを考えたか。 ・ たくさん稽古をして、多くの魚をとってほしい。 ・ 投あみが下手だから仕方ないか。 ・ 投あみが下手なんだから、魚をあげる必要はない。 (3) 戸のすきまから、半助の話を聞いた万七はどんな気持ちだったか。 ・ 半助の気持ちも分からずひどいことを言ってしまった。 ・ 半助もかげでがんばっていたんだ。 ・ もう少し半助のことを分かってあげればよかった。 (4) 空をながめながら、万七はどんなことを考えたか。 ・ 明日からは、半助にひどいことを言うのをやめよう。 ・ 半助に謝ろう。	・投網が下手な半助に対して、困っている万七の気持ちに共感させる。 ・いつまでも上手にならず迷惑をかけている半助に対して、いろいろな思いを抱いている万七の気持ちに共感させる。 ・半助のことを何も分からずに行動していた自分を反省している万七の気持ちに気付かせる。 ・相手の立場を大切にしようとしている万七の気持ちに気付かせる。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今まで自分と異なる意見や立場があったとき、広い心をもって意見や立場を受け入れ大切にすることはあるか。	・今までの自分の行為を振り返り、できた自分やできなかった自分に気付かせる。
4 教師の説話を聞く。 ○ 自分と異なる意見や立場を大切に話をした話をする。	

あの感動を伝えたい
―夕焼け小焼け― なかむらうこう
中村雨紅―(八王子市)

一 ねらい
美しいものや気高いものに感動する心情を育てる。

二 資料選定の理由

・ 本来人間は、自然との日々のはれあいによって様々な思考や感情を発展させ、豊かな心を形成していく。本資料は、子供達にとつて親しみのある曲「夕焼け小焼け」を作詞した中村雨紅についての話である。感動したことを広く子供達に伝え、子供の心を豊かにしたいと願う雨紅の気持ちを感ぜとらせる。また、美しいものや気高いものに感動する心について考えさせ、人間としての在り方や生き方の自覚を一層深めることができる。

三 指導上の留意点と工夫

- ・ 子供達が雨紅の感動した情景を想像できるように、視覚教材(写真、一枚絵等)を用意する。
- ・ 雨紅が、ふるさとの自然の恵みが人々の心に深い安らぎと生きる力をいつまでも与えてくれることを願って作詞したことを、とらえられるようにする。
- ・ 自分の経験を振り返る場面では、感動は自然の摂理に限定するのではなく、動植物の誕生や成長、人の行動や心の在り方などにも広げて考えられるようにする。
- ・ 終末では、「夕焼け小焼け」の曲を入れてまとめるなど、余韻が残るように工夫する。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 本時で学習することをつかむ。</p> <p>○ 中村雨紅や「夕焼け小焼け」の碑についての説明を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 恩方地区の情景や「夕焼け小焼け」の碑などの写真を提示し、視覚に訴えるようにする。
<p>2 資料「あの感動を伝えたい」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 家路を急いでいた雨紅は、どんなことを考えていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家では家族が自分の帰りを待っている。 ・ 早く家族に会いたいなあ。 ・ みんな元気かな。 <p>(2) 自宅への帰り道で、雨紅はどんなことが心に残ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 豊かな自然の美しさ。 ・ 山に沈む夕日、つり鐘の響き、浮かび上がる山々、からす、丸い月、きらめく星。 <p>(3) 雨紅はどんな思いや考えから、「夕焼け小焼け」の詞を作ったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ このすばらしさを他の人にも伝えたい。 ・ 多くの人にこの感動を伝えたい。 ・ 日本中の子供達にも、八王子の自然の美しさを伝えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 14歳という年齢で、親元を離れて暮らす雨紅の心情に触れるようにする。 ・ 予想される児童の反応を写真や一枚絵等で準備をしておき、黒板に掲示することで情景を印象付けるようにする。 ・ 雨紅が小学校の教員であることをおさえる。 ・ 雨紅がなぜ感動したことを伝えたいと思ったのかについては、補助発問等で聞き返すようにする。
<p>3 美しいものに触れ、感動したというこれまでの経験を話し合う。</p> <p>○ 自分が感動したことを、ほかの人にも伝えたいと思ったことはあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然だけでなく、人の行動や心の在り方にも広げて考えさせる。
<p>4 音楽を聴いて、余韻を残してまとめる。</p> <p>○ 「夕焼け小焼け」の曲を聴く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員で気持ちを込めて合唱することも効果的である。

えどふかがわ
江戸深川（江東区）

一 ねらい

働くことの意義を理解し、進んで公共のためになる仕事をしようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・江東区深川は、江戸時代から急速に開拓が進み、町屋として発展した地域である。この深川を開拓した人物が撰津の地侍だった深川八郎右衛門である。このことは、江東区史、深川区史などから事実であるが、具体的な開拓の様子は明らかでない。東京下町の黎明期を題材としたことで、児童は興味関心をもって学習することができるものと思われる。

・本資料は、幸せに暮らせる村作りを目指して、それぞれが自分に課せられた仕事を行う様子を描いたものである。仕事を進める上での葛藤や、やり遂げた喜びについて、児童は自分が働いた体験に基づきながら考えることができる。

三 指導上の留意点と工夫

・主人公八郎右衛門や小太郎に児童が共感し、その感じ方、考え方を類推できるようにしたい。児童が働くことについての自分自身の感じ方、考え方を語れるような発問を構成することが大切である。
・本資料は、4―(2)の視点からの指導も考えられる。

学習活動	指導上の留意点
1 自分がしている仕事について発表し合う。 ○ 家や学校、地域でどんな仕事をしているか。	・働くことについて考え、資料への導入を図る。
2 資料「江戸深川」を読んで話し合う。 (1) 八郎右衛門は、楽しく暮らせる村を作ろうと考えたが、あれた土地を見てどんな気持ちだったか。 ・ とても大変だ。 ・ 大変だけど、みんなのためにもがんばろう。 (2) 小太郎の話を聞いた八郎右衛門はどんな気持ちだったか。 ・ つらいのはわかるが、投げ出さないでほしい。 ・ やる気を出してほしい。 (3) 佐吉の話を聞いた小太郎は、どんな気持ちで八郎右衛門のところに出かけたのか。 ・ 今まで自分のことしか考えていなかった。 ・ みんながんばっているのだ。自分も働いて役に立ちたい。 (4) 小さな田が黄金色にそまったとき、八郎右衛門はどんな気持ちだったか。 ・ 今までがんばって働いてきて本当によかった。 ・ みんなの力が一つになったからだ。 ・ これでみんなが楽しく暮らしていける。	・働くことの大変さを感じながらも、進んで働こうとする気持ちに共感させる。 ・働くことに意義を見出せずにいる仲間に対する思いを共感させる。 ・自分の仕事に対する疑問や、つい仕事を怠ってしまうことの体験を振り返りながら考えることができるようにする。 ・働くことの大切さや喜びを共感できるようにする。
3 自分の生活を振り返って話し合う。 ○ 今まで、みんなのために仕事をしたことがあるか。そのときどんな気持ちだったか。	・導入で発表した事例をもとに考えるようにする。仕事をした後の気持ちを想起させる。
4 教師の説話を聞く。 ○ 児童の奉仕的な活動の様子を取り上げて話をする。	

トラベリングと口玉くちたまの山（江戸川区）

一 ねらい

理想をはばむ壁に立ち向かい、理想の実現に向かって努力しようとする態度を養う。

二 資料選定の理由

・ガラス風鈴は、日本の夏の風物詩としてたいへんなじみが深いものであるが、その製法についてはほとんど知られていない。江戸川区には古来から伝わる技法で作られているガラス風鈴・江戸風鈴の工房がある。その工房主・篠原儀治氏は江戸風鈴の名付け親でもある。職人として理想を実現するための篠原氏の若い頃の体験や今も理想をもっている姿を描いた本資料を活用することにより、生徒に、理想の実現にむけて努力しようとする態度を養うことができると思われる。

三 指導上の留意点と工夫

・本資料は、江戸風鈴の第一人者、篠原氏の生き方にふれた中学生の主人公が、困難に立ち向かう勇気を得る姿が描かれている。活用にあたっては、主人公の心情を共感的に追求させることによって、「困難にくじけず理想を実現しよう」という気持ちをふくらませることができよう。

・展開で「心のノート」を活用し、夢や理想を実現するために大切なことを自分とのかかわりで考えさせる。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 日本の夏の風物詩について話し合う。 ○ 日本の夏の風物詩をあげてみよう。	・江戸風鈴を見せ、資料への導入を図る。
2 資料「トラベリングと口玉の山」を読んで話し合う。 (1) 隆史は、なぜステップ・インを使わなかったのだろうか。 ・ トラベリングといわれてやる気をなくしている。 ・ トラベリングをするのが怖い。 (2) レポートを読み返していて、笛の音が聞こえた気がしたときの隆史の気持ちはどんなだったろうか。 ・ 自分がトラベリングと判定されたときの気持ちと一緒だったのだろうか。 ・ 篠原さんは、どうやってこの危機を乗り越えたのだろうか。 (3) 「トラベリングの山ができて負けません。」と答えたときの気持ちはどんなだったろうか。 ・ 篠原さんみたいに頑張りたい。 ・ ステップ・インを必ず自分の得意技にしたい。 ・ ぼくに勇気をくれてありがとう。 3 夢や理想を実現するために大切なことを考える。 ○ 夢や理想を実現するために大切なことは何か。	・ステップ・インに対して後ろ向きな隆史の気持ちを共感的に追求させ、困難にくじけがちな自分の心に気付かせる。 ・口玉を使ってもらえなかった篠原氏に自分の体験を重ね合わせながら、篠原氏が壁をどのように乗り越えたかを知り、自分も壁を乗り越えたいという願いに気付かせる。 ・篠原氏の生き方にふれ、困難に立ち向かおうとする隆史の気持ちを追求させる。
4 教師の説話を聞く。	・「心のノート」28.29頁を読み、自分の思いを記入させる。 ・理想の実現に向かって努力することの大切さを教師自らの体験を交えて話す。

「江戸しぐさ」を考えるーめぐりに乗ってー
(台東区)

一 ねらい

礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動を
とうとうとする態度を養う。

二 資料選定の理由

- ・江戸時代、円滑な社会生活を営むための心得・行動様式として、「江戸しぐさ」と呼ばれるものがあつた。他人を思いやり、自他共に大切にすることの理念を具体的に行動として教えるもので、個人の修養の材料としても知られていた。また、これを実践している人を「粋」な人として尊敬の対象にしていた。
- ・本資料は、主人公がめぐりんの中で体験した出来事と弁論大会での江戸しぐさに関する発表とを重ね合わせて考えを深めていく内容である。主人公の気持ちに共感させ、自らを振り返り、適切な言動について考えさせるのに適した資料である。

三 指導上の留意点と工夫

- ・江戸しぐさの根底に流れている共生の理念・人間尊重の精神を十分に理解させることが大切である。その上で「礼儀」の意義について考えさせる。
- ・江戸しぐさの具体的な生活場面の再現など、体験的な学習活動を通して、日常生活の中で時と場に応じた適切な言動をとれるようにさせる。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 江戸しぐさの具体的な生活場面の再現と解説を聞く。 ○ 「傘かしげ」「こぶし腰浮かせ」を実演し合う。	・「江戸しぐさ」が心を伴った行動であることに気付かせる。
2 資料『江戸しぐさ』を考えるーめぐりに乗ってー』を読んで話し合う。 (1) めぐりんの運転手はどのような気持ちで声をかけているのだろうか。 ・ 乗客に気持ちよくバスに乗ってほしい。 ・ あいさつをすることで、お互いに気持ちよく過ごせる。 (2) 『江戸しぐさ』の発表から、私が気付いたことや学んだことは何か。 ・ 江戸しぐさでは相手が誰であろうと等しく接することが大切とされたこと。 ・ 相手のことを考えた行動が心を穏やかにし、より良い社会につながっていること。 ・ 江戸の人が「お互い様だ」という気持ちをもって生活していたこと。 (3) 江戸しぐさの「粋」とは何か。 ・ 思いやりの気持ちをさりげなく表現すること。 ・ 心の中から自然にでたしぐさをする事だ。	・ 中年の女性の言動と対比しながら考えさせる。 ・ あいさつが周囲を明るく和やかにするものであることに気付かせる。 ・ 江戸しぐさが人間尊重の精神から生まれていることに気付かせる。 ・ 時と場に応じた適切な言動とは何かを考えさせる。
3 具体的な生活場面での思いやりのある言動や出来事など、体験を発表し合う。	・ 学校内や公共の交通機関での経験を振り返らせる。
4 教師の説話を聞く。 ○ 礼儀やマナーが人間性を表現することを話す。	

小さな工場こうばの大きな仕事（大田区）

一 ねらい

勤労の尊さや意義を理解し、勤労を通して社会に貢献しようとする態度を養う。

二 資料選定の理由

本資料は、町工場で生活している主人公が、職場体験や家族とのふれあいを通して、職業について理解を深めていく内容である。

中学生の時期は、進路や職業についての関心が高まるが、とかく自己中心にとらえてしまう傾向がある。本資料は、主人公の心情の変化を通して、職業についての理解を深め、勤労により社会に貢献しようとする姿勢を養っていくことに適したものである。

三 指導上の留意点と工夫

導入では、どのような職業に就きたいか、自由に発言させ、授業前の職業観を把握しながら、授業を進める。展開では、職業を安易にとらえていた主人公が、家族とのふれあいから、職業について真剣に考え、理解を深めていく姿に共感させる。
 ・働くとは、はた（他人）をらく（楽にする）というところ、見かけや個人の利益だけではなく、自己の技術や能力を生かしながら、社会に貢献する意味があるということに気付かせる。

学習活動	指導上の留意点
1 将来なりたい職業について、自由に発表する。 ・ サッカーの選手。 ・ ペットショップの店員。	・自由に発言させ、なりたい理由を聞く。
2 資料「小さな工場の大きな仕事」を読んで話し合う。 (1) 職場体験のときに、弁当を置いていった僕の気持ちは、どうだろうか。 ・ 油の匂いがついていそうで、恥ずかしいな。 ・ せっかく作ってくれた弁当だけど、どうしようか。 ・ 会社で昼食をとる方がいいな。 (2) 僕は、ソフト会社で職場体験をし、どのような感想をもったか。 ・ イメージしていたものと、ずいぶん違うな。 ・ ゲームソフトを作るためには、いろいろな仕事に関係しているんだな。 (3) 「父の黒い手が、誇らしく見えました。」とあるが、なぜ、このように感じたのだろうか。 ・ 父親の偉大さを感じた。 ・ 働く父親を誇りに思った。 3 「働く」とはどのようなことか考える。 ○ 人は、何のために働くのか。 ・ 自分や家族のため。 ・ 社会に役立つため。 ・ 自分を生かすため。	・弁当を工場の象徴とし、ソフト会社と対峙させたい。弁当を置いていった僕の気持ちを考えさせる。 ・ゲームソフトを作るにもいろいろな部署があり、多くの人がかかわっていることに気付かせたい。また、見た目と実際では、異なることも理解させたい。 ・「かっこいい。」「儲かる。」という観点で、職業をとらえていた僕について考えさせ、職業に対する見方を深めさせたい。 ・「誰のために働くのか。」「何のために働くのか。」について自分のこととして考えさせる。
4 教師の説話を聞く。 ・ 「なぜ、教師になったのか。」などについて話す。	・教師としての社会貢献について触れる。

海苔の町のり — 大森おおもり — (大田区)

一 ねらい

人々の郷土に対する誇りと願いに気付かせ、郷土の発展に努めようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料の「大森ふるさとの浜辺公園」は平成十九年四月に公開される。海との接点がなくなつた大森の町に、再び海との接点を回復させ、地域の伝統を継承していくことを一つの目的にしている。また、本資料に登場する岡崎さん、西村さんは、本事業に尽力された実在の人物である。

・本資料は、郷土意識や地域社会に対する連帯感が希薄な現在、海苔づくりという郷土の伝統・文化に誇りをもち、新しい形で継承していこうとする地域の人々の、ふるさとへの思いに気付かせ、考えさせることができるものと思われる。

三 指導上の留意点と工夫

・郷土の伝統・文化のすばらしさとそれを誇りとする地域の人々の思いに気付かせるようにする。
 ・伝統・文化に愛着をもって、ふるさとを再生しようとする地域の人々の思いや願いに気付かせる。
 ・地域は大切なふるさとであることを自覚し、先人の思いを受け継ごうとする気持ちを考えさせる。

学習活動	指導上の留意点
1 海苔について知っていることを発表し合う。 ○ 海苔は、どこでどのように作られているのか。	・海苔の養殖の写真を見せるなど、関心・興味を喚起する。
2 資料「海苔の町—大森—」を読んで話し合う。 (1) 「大森ってすごいんだなあ。」と言った義之は、どんな気持ちか。 ・ 大森の町にこんなすばらしい伝統・文化があったのだ。 ・ 地域に誇りをもっている人々がいてうれしい。 (2) 大森ではもう海苔は作られていないことを岡崎さんから聞いた義之は、どんな気持ちか。 ・ せっかくの伝統がなくなってしまって悔しい。 ・ この町の誇りがなくなっていやだ。 (3) 海を見つめる義之の心の中に溢れる熱い思いとは、どんな気持ちか。 ・ 地域のすばらしい伝統・文化をみんなに伝えていこう。 ・ ふるさとの浜辺に託した地域の人々の心を大切にしたい。 ・ 岡崎さんや西村さんのように、地域に誇りをもって、地域のために何かしていきたい。	・岡崎さんや西村さんが、義之に自分のことのように海苔の歴史を語る姿を思い浮かべながら考えさせる。 ・海苔の生産という伝統に、この町の誇りを見出していた義之の気持ちを踏まえて考えさせる。 ・岡崎さんや西村さん、地域の人々の思いを感じて、義之はどのような気持ちになったかを考えさせる。
3 自分と郷土とのかかわりについて考える。 ○ 自分たちの町に自慢できるものはあるか。 ○ 地域のために、どのようなことができるか。	・郷土の伝統・文化や自然などについて感じたことを話し合うようにする。
4 教師の説話を聞く。 ○ 自分にとって郷土はどのようなものであったかを話す。	・ゲストティーチャーを招いて、考えさせることもよい。

麗しの歌舞伎座 (中央区)

- 一 ねらい
優れた日本の文化・伝統を理解し、継承していこうとする態度を養う。

二 資料選定の理由

- ・歌舞伎座は、中央区東銀座にある。この桃山様式の劇場に一步入るだけで、誰もが歌舞伎独特の文化や伝統に浸ることができる。主人公は隣接地に住んでいるものの、深くその歴史について学ぶことはなかった。カレンとの出会いがきっかけで、歌舞伎を調べる主人公の気持ちの変化に着目させることで、生徒は興味・関心をもって学習できるものと思われる。
- ・生徒に、主人公の歌舞伎座への感じ方、考え方の変化に気付かせる。そこで、主人公に託して自分の感じ方、考え方を語れる発問を構成するようにする。

三 指導上の留意点と工夫

- ・生徒が、歌舞伎を大切に思う亜紀の気持ちを想像できるようにする。その上で日本の文化・伝統についての理解を深め、継承することの大切さについて考えさせる。また、文化や伝統の保存と、便利さを享受することのバランスについても考えさせたい。
- ・体験を振り返る活動では、日本の文化・伝統を意識した体験を想起させ、そのときの心情について発表させる。また、友達との意見交流を図らせる。
- ・二・三年生での扱いが望ましい。

四 展開例

学習活動	指導上の留意点
1 日本の文化・伝統について話し合う。 ○ 能や歌舞伎を見たことがあるか。	・歌舞伎座の写真を提示する。
2 資料「麗しの歌舞伎座」を読んで話し合う。 (1) 最初、亜紀は歌舞伎に対する興味をもっていましたが、歌舞伎座を嫌だと感じるようになったのはどんな気持ちからか。 ・ 座席が狭く、国際的な劇場として機能できない。 ・ 近代的なビルに比べて古めかしい。 (2) 自国の文化に誇りをもっているカレンを見ながら亜紀は、どんなことを考えたか。 (補助発問) 中村さんの話から亜紀が考えたことは何か。 ・ 歌舞伎座を調べ、自信をもって日本の文化・伝統について話せるようになりたい。 ・ 伝統を守る人の心意気に触れ、住民として協力したい。 (3) 歌舞伎座に隣接する地域の住民として、歌舞伎の伝統を継承するためにどうしていこうと考えているか。 ・ 日本の文化・伝統の一つとしてしっかり守っていききたい。 ・ 歌舞伎をもっと理解し、普及させる活動に参加したい。	・ 都会の華やかさをよしとし、古いものを厭う気持ちが芽生えた亜紀の気持ちを受け入れさせるようにする。 ・ 歌舞伎座を「憩いの場」「心のよりどころ」と考えるようになる亜紀の言動の変化に着目させる。 ・ 中村さんとの会話も視野に入れながら考えさせる。 ・ 亜紀の気持ちに共感させ、生徒一人一人に自分のこととして考えさせる。
3 日本の文化・伝統を意識した体験を思い出して話し合う。 ・ 鎌倉遠足に行ったり、総合的な学習の時間で伝統工芸体験をしたりしたとき。 ・ 修学旅行で京都の寺院を訪れたとき。	・ これまでの体験をもとに日本の文化・伝統を意識したときのことを想起させるようにする。
4 教師の説話を聞く。 ○ 日本の文化・伝統のすばらしさを感じた体験を語る。	

各資料と内容項目との関連

集	学年	視点及び 内容項目 資料名	1						2					3			4											
			主として自分自身に 関すること						主として他の人との かかわりに関すること					主として自然や崇高な もののかかわりに関 すること			主として集団や社会との かかわりに関すること											
			(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)		
第1集 (平成十七年度)	小学校低学年	1 とうふや 八べえ				★																						
		2 たま川の夕日							★																			
		3 やまめの やまちゃん												★														
		4 かっぱと 与助												★														
		5 たのしい 一日													★													
	小学校中学年	1 人力車			★																							
		2 花と緑のまち									★																	
		3 三河島のつる												★														
		4 わらじじぞう													★													
		5 ぼくたちの多摩川																				★						
	小学校高学年	1 岩淵水門			★																							
		2 心の通い合い									★																	
		3 大賀博士を支えた人々											★															
		4 天然痘とたたかう													★													
		5 マネージャー														★												
中学校	1 苦い映画の思い出			★																								
	2 車人形									★																		
	3 焼けた空														★													
	4 甘い小松菜															★												
	5 御蔵島の心																								★			
第2集 (平成十八年度)	小学校低学年	1 たかおの 山の てんぐ			★																							
		2 あいさつ通り									★																	
		3 ようこそ はな子さん												★														
		4 うえの先生と ハチ														★												
		5 おじぞうさま															★											
	小学校中学年	1 玉川上水と玉川兄弟			★																							
		2 全校遠足とカワセミ											★															
		3 野鳥のすむ水辺													★													
		4 日曜日のバーベキュー															★											
		5 くじら祭																				★						
	小学校高学年	1 波浮のお池			★																							
		2 心にふく風										★																
		3 半助の投あみ												★														
		4 あの感動を伝えたい ー夕焼け小焼け 中村雨紅ー															★											
		5 江戸深川																				★						
中学校	1 トラベリングとロ玉の山				★																							
	2 「江戸しぐさ」を考える ーめぐりに乗ってー										★																	
	3 小さな工場の大きな仕事																				★							
	4 海苔の町 ー大森ー																								★			
	5 麗しの歌舞伎座																									★		

作成協力者

(職名は平成19年3月現在)

《第2集》

平成18年度 道徳授業地区公開講座推進委員会

【小学校】

委員長	福田	富美雄	北区立王子小学校校長
委員	堀田	直樹	八王子市立中野北小学校副校長
	武田	淳	中野区立中野神明小学校主幹
	大野	寿久	国分寺市立第十小学校主幹
	橋本	ひろみ	世田谷区立松原小学校教諭
	後々	陽子	青梅市立河辺小学校教諭
	齋藤	賢二	調布市立布田小学校教諭
	鈴木	裕子	町田市立忠生第一小学校教諭

【中学校】

委員長	山田	佳子	大田区立矢口中中学校校長
委員	宮澤	一則	大田区立出雲中学校副校長
	坂口	幸恵	江戸川区立瑞江第二中学校副校長
	鮫島	千恵子	大田区立大森東中学校主幹
	小山	博史	八王子市立宮上中学校主幹
	宇津木	美佐子	台東区立忍岡中学校教諭
	小貝	宏	江戸川区立松江第五中学校教諭

なお、東京都教育委員会においては、次の者が本書の編集に当たった。

大江	近	教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課長
上原	一夫	教育庁指導部主任指導主事
臼倉	美智	教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課統括指導主事
井尻	郁夫	同 指導主事
前田	元	同 指導主事

作成協力者

(職名は平成18年3月現在)

《第1集》

平成17年度 道徳授業地区公開講座推進委員会

【小学校】

委員長	福田	富美雄	北区立王子小学校校長
委員	筒井	鉄也	江東区立第六砂町小学校副校長
	武田	淳	中野区立中野神明小学校主幹
	大野	寿久	小平市立小平第八小学校主幹
	橋本	ひろみ	世田谷区立松原小学校教諭
	中嶋	博子	青梅市立第一小学校教諭
	齋藤	賢二	調布市立布田小学校教諭
	鈴木	裕子	町田市立忠生第一小学校教諭

【中学校】

委員長	坂谷	利雄	葛飾区立青戸中学校校長
委員	宮澤	一則	大田区立出雲中学校副校長
	坂口	幸恵	江戸川区立瑞江第二中学校副校長
	鮫島	千恵子	大田区立大森東中学校主幹
	鴨井	雅芳	目黒区立東山中学校教諭
	篠塚	浩幸	調布市立神代中学校教諭
	池田	富太郎	西東京市教育委員会指導主事

なお、東京都教育委員会においては、次の者が本書の編集に当たった。

大江	近	教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課長
上原	一夫	教育庁指導部主任指導主事
赤堀	博行	教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課統括指導主事
臼倉	美智	同 統括指導主事
田畑	美香	同 指導主事
井尻	郁夫	同 指導主事

平成18年度 東京都道德教育郷土資料集（第2集）

東京都教育委員会印刷者登録
平成18年度 第243号

平成19年3月28日

編集・発行 東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課

所在地 東京都新宿区西新宿2-8-1

電話番号 (03) 5320-6841

印刷会社 前田印刷株式会社



古紙配合率70%再生紙を使用しています

